

十月 堀辰雄 附やぶちゃん注

「やぶちゃん注」十月」は昭和一八（一九四三）年一月から『婦人公論』に連載を始めた「大和路・信濃路」で「十月（一）」「十月（二）」と題して昭和一八（一九四三）年一月号に掲載された。後に「十月」と改題して、作品集「花あしび」（青磁社昭和二一（一九四六）年刊）に所収された。

このロケーションは発表に先立つ一年二ヶ月前の昭和一六（一九四一）年の秋十月である。この十月十日、創作のために杉並の家を単身出発、十月二十九日に帰京するまでを妻多恵子宛の書簡を基にしつつ、加筆したのが本作である。十月十日の到着から起し、十月二十七日の琵琶湖畔で擱筆している（最後のクレジットは操作が入っているように思われる）。

底本は[国立国会図書館の近代デジタルライブラリー](#)の[角川書店昭和二三（一九四八）年刊の「堀辰雄作品集 六 花を持てる女」](#)所収の正字正仮名ものを視認した。各条の間は一行空けであるが、注（本文との間に一行空け）を施した関係上、二行空けにしている。

各条の後に簡単な注というか、感想を含んだ蛇足を附してある。私は奈良に数度しか行ったことがない嘲笑されるべき迂闊な人間である。されば、奈良通の方には言わずもがなのへんてこりんな注と感じられる箇所もあろうかと存ずるが、御寛恕願いたい。私は私も作中主人公と一緒に奈良の散策を同じゅうしたいだけのことである。奈良を分かり切っておられるという方は、本文のみを味わうに若くはあるまい。なお、注に用いた年譜的事実については、諸書の年譜資料の他、個人サイト「タツノオトシゴ」の詳細な「[年譜](#)」も参考させて戴いた。ここに謝意を表しておく。【二〇一五年五月四日 藪野直史記】

ブログ公開終了後に一部注に追加を加えた決定稿をワード縦書文書で公開した。ここからの引用であることを明記されれば、原文加工や注の引用等、自由にお使い下さって結構である。【二〇一五年五月二十七日 藪野直史追記】WordのUnicodeを使い慣れていなかったために、正字不全があったこと、単純な誤字があったため、再度、底本を元にブログ版とともに、全校正をし直した。【二〇二三年二月三日 藪野直史】

十月

一

一九四一年十月十日、奈良ホテルにて

くれがた奈良に著いた。僕のためにとつておいてくれたのは、かなり奥まった部屋で、なかなか落ちつけさうな部屋で好い。すこうし仕事をするのには僕には大きすぎるかなと、もうここで仕事に没頭してゐる最中のやうな氣もちになつて部屋の中を歩きまはつてみたが、なかなか歩き度がある。これもこれでよからうといふ事にして、こんどは窓に近づき、それをあげてみようとして窓掛に手をかけたが、つい面倒になつて、まあそれくらいはあすの朝の樂しみにしておいてやれとおもつて止めた。その代り、食堂にはじめて出るまへに、奮發して髭を剃ることにした。

「やぶちゃん注…この昭和十六年十月十日（土曜）の午前中に杉並成宗（在の杉並区大宮・成田東・成田西の一部を包括した旧地域名で、その成田東に妻の実家があり、この前年三月に、鎌倉からここへ転居していた）の自宅を出発、叙述通り、夕刻（推定午後六時代）に奈良県奈良市高畑町の、現在でも「西の迎賓館」呼ばれる高級ホテルである奈良ホテルに到着している。「東京紅團」の「堀辰雄の奈良を歩く」の「大和路編1」で辰雄が滞在した部屋に印を施した多恵子宛絵葉書（十六日夜附）画像が見られる。同ホテルには二十日間泊まったことになっている（例えばウイキの「奈良ホテル」の記載）が、この記録自体は正しいものの、実際には十月二十八日（水曜）の早朝に荷物を奈良ホテルに預けたままで滋賀に向い、琵琶湖ホテルに一泊し、二十九日に戻つて奈良ホテルを引き払っている。」

十月十一日朝、ヴェランダにて

けさは八時までゆつくりと寝た。あけがた静かで、寝心地はまことにいい。やつと窓をあけてみると、僕の部屋がすぐ荒池あらいけに面してゐることだけは分つたが、向う側はまだぼおつと濃い霧につつまれてゐるつきりで、もうちよつと僕にはお預けといふ形。なかなかもつたいぶつてゐやあがる。さあ、この部屋で僕にどんな仕事が出来るか、なんだかかう仕事を目の前にしながら嘘みたいに嬉しい。けふはまあ軽い小手しらべに、ホテルから近い新薬師寺ぐらゐのところでも歩いて来よう。

「やぶちゃん注…十月十一日」この日は日曜日であった。

「荒池」これは一般名詞ではなく、この池の通称固有名詞である。[ウィキの「奈良ホテル」](#)によれば（下線やぶちゃん）、奈良ホテルは『春日大社一の鳥居前から天理方面へ向かう』国道百六十九号（天理街道）沿いにあり、『荒池と呼ばれる農業用灌漑池の畔、かつては興福寺の塔頭である大乘院が所在した跡地の小高い丘に建って』いるとある。彼がこのホテルを選んだその時から、既にして彼のタイムマシンは作動しているのである。

「新薬師寺」奈良ホテルの同じ高畑町の西南西にあり、直線で一・二、実測歩行距離約一・五キロメートル。」

夕方、唐招提寺にて

いま、唐招提寺の松林のなかで、これを書いてゐる。けさ新薬師寺のあたりを歩きながら、「或門のくづれてゐるに馬酔木かな」といふ秋櫻子の句などを口ずさんでゐるうちに、急に矢も楯もたまらなくなつて、此處に來てしまつた。いま、秋の日が一ぱい金堂や講堂にあたつて、屋根瓦の上にも、丹の褪めかかつた古い圓柱にも、松の木の影が鮮やかに映つてゐた。それがたえず風にそよいでゐる工合は、いふにいはれない爽やかさだ。此處こそは私達のギリシアだ——さう、何か現世にこせこせしながら生きてゐるのが厭になつたら、いつでもいい、ここに來て、半日なりと過ごしてゐること。——しかし、まづ一番先きに、小説なんぞ書くのがいやになつてしまふことは請合ひだ。……はつはつは、いま、これを讀んでゐるお前の心配さうな顔が目に見えるやうだよ。だが、本當のところ、此處にかうしてゐると、そんなはかない仕事にかかはつてゐるよりか、いつそのこと、この寺の講堂の片隅に埃だらけになつて二つ三つころがつてゐる佛頭みたいな、自分も首から上だけになつたまま、古代の日々を夢みてゐたくなる。……

もう小一時間ばかりも松林のなかに寝そべつて、そんなはかないことを考へてゐたが、僕は急に立ちあがり、金堂の石壇の上に登つて、扉の一つに近づいた。西日が丁度その古い扉の上にあたつてゐる。そしてそこには殆ど色の褪めてしまつた何かの花の大きな文様が五つ六つばかり妙にくつきりと浮かび出てゐる。そんな花文のそこに残つてゐることを知つたのはそのときがはじめてだつた。いましがた松林の中からその日のあつてゐる扉のそのあたりになんだか綺麗な文様らしいものの浮き出てゐるのに氣がつき、最初は自分の目のせめかと疑つたほどだつた。——僕はその扉に近づいて、それをしげしげと見入りながらも、まだなんとなく半信半疑のまま、何度もその花文の一つに手でさはつてみようとしかけて、ためらつた。をかしなことだが、一方では、それが僕のこととききりの幻であつてくれればいいといふやうな氣もしてゐたのだ。そのうちその扉にさしてゐた日のかげがすうと立ち去つた。それと一しよに、いままで鮮やかに見え

てみたそのいくつかの花文も目のまへで急にぼんやりと見えにくくなつてしまった。

「やぶちゃん注…「唐招提寺」一度、奈良ホテルへ戻ったものであろうが、唐招提寺は実に奈良駅を挟んで正確に真西の対称位置に位置しており、この主人公の動きが私には非常に面白いものに感ぜられるのである。

「或門のくづれてゐるに馬酔木あしびかな」水原秋桜子の句集「葛飾」（昭和五（一九三〇）年馬酔木発行所刊）所収の「大和の春」の中の一句。季は春。この想起の句が実際の秋と混淆して時空間をメタモルフォーゼ変容させていることに注目されたい。

「褪めかかった」「さめかかった」と読む。

「まづ一番先きに、小説なんぞ書くのがいやになつてしまふことは請合ひだ」ここにこそ辰雄の、近代芸術の持つ矮小性や限界性への感懐が吐露されていると私は読む。近代文芸などというものは、古の歴史の時間の前にあっては、まさにその程度のものでしかないと、私も思うからである。しかし、この謂いは同時に書いている自身を危うくする。そのために巧みに主人公は現実の時間を錯覚させようと試み、その程度のものでしかないながら自身の書かんとしている小説内時間へと、自身をダブらせてゆくのである。

「この寺の講堂の片隅に埃だらけになつて二つ三つころがつてゐる佛頭みたいにな、自分も首から上だけになつたまま、古代の日々を夢みてゐたくなる」私の非常に好む箇所である。

「何かの花の大きな文様」現在では（恐らく辰雄が見た八十四年前も）摩耗が著しく現在はその紋様をみることは不可能に近いが、現在の画像を見る限りでは、扉上方に骰子の五の目型に丸い紋様全景があるように視認出来る。これは恐らく、宝相華文ほうそうげもんと呼ばれる仏教系文様の一種と思われる。「ブリタニカ国際大百科事典」によると、「宝相」とはバラ科に属する植物の中国名で、これを文様としたものとも言われるが、別にまた、蓮華文の変化したものと、アオイ科のブツソウゲを文様化したものとも言われる。優美に文様化された植物の装飾文様で唐花・瑞花とも言う、とある。[グーグル画像検索「宝相華文」](#)をリンクして、その「幻」の花を読者のそれぞれにイメージして戴いたところで、この条の注を終わることとする。私はこの条のエンディングを、殊の外、偏愛しているのである。」

十月十二日、朝の食堂で

けさはもう六時から起きてゐる。朝の食事をするまへに、大體こんどの仕事のプランを立てた。とにかく何處か大和の古い村を背景にして、[1911](#)風なものが書いてみたい。そして出来るだけそれに萬葉集的な気分を漂はせたいものだとおもふ。——ちよつと待った、お前は僕が何かといふとすぐイディルのやうなものを書きたがるので、またかと思つてゐることだらう。しかし、本當をいふと、僕は最近ケーベル博士の本を読みかへ

したおかげで、いままでいい加減に使つてゐたそのイデイルといふ様式イ、デ、イ、ルの概念をはじめではつきりと知つたのだよ。ケーベル博士によると、イデイルといふのは、ギリシア語では「小さき繪」といふほどの意ださうだ。そしてその中には、物靜かな、小ぢんまりとした環境に生きてゐる素朴な人達の、何物にも煩はせられない、自足した生活だけの描かれることが要求されてゐる。……どうだ、分かつたかい、僕がそれより他にいい言葉がなかつたので半ば間にあはせに使つてゐたイデイルといふのが、思ひがけず僕の考へてゐたものとそっくりそのままなのだ。もうこれからは安心して使はう。いい譯語が見つかつてくれればいいが（どうも牧歌ま、か、なんぞと譯してしまつてはまづいんだ）……

さて、お講義はこの位にしておいて、こんどの奴はどんな主題にしてやらうか。なんしろ、萬葉風となると、はじめての領分なのだから、なかなかおいそれとは手ごろな主題も見つかるまい。そのくせ、一つのを考へ出さうとすると、あれもいい、これもちよつと描けさうだ、と一ぺんにいろんなものが浮かんで來てしまつてしやうがない。ままよ、けふは一日中、何處か古京のあとでもぶらぶら歩きながら、なまじつかこつちで主題を選ばうなどしなないで、どいつでもいい、向うでもつて僕をつかまへるやうな工合にしてやろう。……

僕はそんな大様な氣もちで、朝の食事をすませて、食堂を出た。

「やぶちゃん注：「Idyll」私の持つ「羅和事典」には *idylum* とあつて、ただ「牧歌」とある。「研究社英和辞典」を見ると、*Idyll*（名詞・可算名詞）①田園詩・牧歌（田園詩に適する）ロマンチックな物語／②田園風景（生活など）／③「音楽用語」田園詩曲／④かりそめの恋・情事とあり、語源としてギリシア語で「小さな繪画」の意とある。同社「リーダーズ・プラス」によれば、ギリシア語由来のラテン語が語源とあり、*aidos*（形の意）の指小辞とある。則ち、本来は「小さな形のもの」の謂いである。そこで今度は *aidos* を調べると、ギリシア語 *aidos*（エイドス）はプラトン哲学に於ける「イデア」とほぼ同じ概念を指す重要な概念であることが分かる。本邦ではしばしば「形相」と訳されるものである。それを受けるアリストテレス哲学に於いては、一種類の事物を他のものから区別する本質的特徴の謂いとなる。ウィキの「エイドス」を見ると、アリストテレスは『魂とは可能的に生命をもつ自然物体（肉体）の形相であらねばならぬ』と語る。ここで肉体は質料にあたり、魂は形相にあたる。なにもものかでありうる質料は、形相による制約を受けてそのものとなる。いかなる存在も形相のほかに質料をもつ点、存在は半面においては生成でもある。『質料そのもの（第一質料）はなにもものでもありうる（純粹可能態）。これに対し形相そのもの（第一形相）はまさにあるもの（純粹現実態）である。この不動の動者（「最高善」＝プラトンのイデア）においてのみ、生成は停止する。』すなわち、万物はたがいの他の可能態となり、手段となるが、その究極に、けつして他のもの的手段となることはない、目的そのものとしての「最高善」がある。この最高善を見いだすことこそ人生の最高の価値である、とした』とある。私はお雇い

外国人として東京帝国大学で哲学と西洋古典学を教えた、知られた哲学者ラファエル・フォン・ケーベル (Raphael von Koerber) 一八四八年〜一九二三年 ロシア出身のドイツ系ロシア人) をまともに読んだことがない迂闊にして暗愚な人間である。この注を附すために、今更ながらケーベル先生の著作を買って繙くほどの余裕もないが、何か、この辰雄が「牧歌」などという邦訳は厭だという彼方に、極限にまで凝集した——形相そのもの(第一形相)としてのまさに「在るもの(純粹現実態)——としてのエイドスを私は見たように思うのは——とんだ、お門違いなのかも知れないが——私は私としてそれで腑に落ちたのである。』

午後、海龍王寺にて

天平時代の遺物だといふ轉害門てがいもんから、まづ歩き出して、法蓮ほふれんといふちよつと古めかしい部落を過ぎ、僕はさもいい氣もちさうに佐保路さほぢに向ひ出した。

此處、佐保山のほとりは、その昔、——ざつと千年もまへには、大伴氏などが多く邸宅を構へ、柳の竝木なども植ゑられて、その下を往來するハイカラな貴公子たちに心ちのいい樹蔭をつくつてゐたこともあつたのださうだけれど、——いまは見わたすかぎり茫茫とした田圃で、その中をまつ白い道が一直線に突つ切つてゐるつきり。秋らしい日ざしを一ぱいに浴びながら西を向いて歩いてゐると、背なかが熱くなつてきて苦しい位で、僕は小説などをゆつくりと考へてゐるどころではなかつた。漸つと法華寺村ほつげじに著いた。

村の入口からちよつと右に外れると、そこに海龍王寺かいりゅうおううじといふ小さな廢寺がある。その古い四脚門の陰にはひつて、思はずほつとしながら、うしろをふりかへつてみると、いま自分の歩いてきたあたりを前景にして、大和平やまとたいへい一帯が秋の收穫を前にしていかにもふさふさと稲の穂波を打たせながら擴がつてゐる。僕はまぶしさうにそれへ目をやつてゐたが、それからふと自分の立つてゐる古い門のいまにも崩れて來さうなのに氣づき、ああ、この明るい温かな平野が廢都の跡なのかと、いまさらのやうに考へ出した。

私はそれからその廢寺の八重葎やへむぐらの茂つた境内にはひつて往つて、みるかげもなく荒れ果てた小さな西金堂さいこんだう(これも天平の遺構ださうだ……)の中を、はづれかかつた櫺子れんじごしにのぞいて、その天平好みの化粧天井裏を見上げたり、半ば剝落した白壁の上に描きちらされてある村の子供のらしい樂書を一つ一つ見たり、しまひには裏の扉口からそつと堂内に忍びこんで、磚せんのすき間から生えてゐる葎までも何か大事さうに踏まへて、こんどは反對に櫺子の中から明るい土のうへにくつきりと印せられてゐる松の木の影に見入つたりしながら、さう、——もうかれこれ小一時間ばかり、此處でかうやつて過ごしてゐる。女の來るのを待ちあぐねてゐる古ふるの貴公子のやうにわれとわが身を描いたりしながら……

「やぶちゃん注」海龍王寺」奈良県奈良市法華寺北町にある真言律宗の寺院。本尊は十一面観音。光明皇后の皇后宮（藤原不比等の邸宅跡）の北東隅に建てられたことから「隅寺」の別称がある（[ウィキの「海龍王寺」より](#)）。[同寺公式サイト](#)の「歴史」によれば、飛鳥時代に毘沙門天を本尊として建てられた寺院を、天平三（七三一）年に光明皇后が海龍王寺として改めて創建、苦難の末に唐より帰国を果たした玄昉が初代住持となつたことから、遣唐使の航海安全祈願を営むと同時に平城京内道場の役割を果たすことともなつたとある。『平安時代となり、都が平安京に移ると平城京は衰退し、海龍王寺も同様に衰退してい』つたものの、『鎌倉時代になると真言律宗を開いた興正菩薩叡尊により伽藍の大修理を受けると戒律の道場や勉学所として栄え』、鎌倉幕府は関東御祈願三十四箇寺の一つ選んでいる。『しかし、室町時代になり応仁の乱が起ると奈良も影響を受け、海龍王寺一帯も戦場とな』り、『打ち壊しや略奪の被害を被つたことから再び衰退の一端を』辿つた。『江戸時代になり徳川幕府から知行百石を受けることとなり、本堂や仏画の修理が行われると同時に「御役所代行所」としての役割を果たし』のも束の間、『明治時代の廃仏毀釈の際に東金堂や什器を失うという大きな打撃を受け』、辰雄が訪れた頃には無住のまさに「廢寺」同前であつた（後注参照）。

「轉害門」奈良ホテルから国道三六九号を真北に向つて一・四キロメートル地点で西からの一条通りとにぶつかる場所に東大寺の境内西北（正倉院西側）の三間一戸八脚門。平安末と室町の戦火を潜り抜けてきた東大寺でも数少ない建造物の一つで、天平時代の東大寺の伽藍建築を想像し得る唯一つの遺構とされる（鎌倉期の修理によって一部が改変されているものの基本部分は奈良の遺稿が保存されているとされる）。

「法蓮」「佐保路」轉害門前を西に折れて一条通りを真西に向い、佐保川の法蓮橋を渡つたところから西が現在の法蓮町である。轉害門そのものから法蓮橋までは凡そ五百メートル強である。ここから真西にさらに真西に法蓮仲町の交差点を過ぎて一条通りを八百メートルほど辿るとかつての小字地名と思われる辰雄のいう「佐保」路を通過する。現在の法蓮町は東西にかなり広く、西は関西本線を越えて現在の奈良バイパスが一条通りと交叉する箇所（法華寺東交差点。ここまでは法蓮橋から約一・七キロメートル）まであり、ここから西が知られた法華寺や、彼が次に向かつた海龍王寺のある法華寺町となつている。海龍王寺へはこの（法華寺東交差点から一条通りを四百七十メートルほど歩き、通りが真北へ折れた直近（法華寺の極直近の東北位置）にある。なお、新潮文庫版「大和路・信濃路」では「佐保路」に「さおじ」とルビを振るが、現行でも「さほじ」が正しい。

「佐保山」は先のロケーションの丁度、中間点辺りの真北にあつた山で、広域的には阿保山・奈保山（法蓮町・奈保町一帯）を含む、佐保川北方に広がる丘陵地帯の総称でもある。西部の佐紀山と合わせて平城山丘陵を形成し、周囲には聖武天皇ら皇族の陵墓が点在し、古くから桜の名所と知られる地域であつて、特に南部を流れる佐保川沿いの桜並木が有名である。この事から、佐保山には春を司る神霊が宿つていると考えられ、佐

保姫と呼ばれる女神が信仰されていたが、グーグルのストリート・ビューで見ても、現在では開発が進み、運動公園や学校、住宅地などになって辰雄が歩いた頃の「見たすかぎり茫茫とした田圃で、その中をまっ白い道が一直線に突っ切つてゐるつきり」と描写する素朴な田園風景からは全く変容してまった(以上はウイキの「佐保山」に拠った)。「海龍王寺といふ小さな廢寺」「その古い四脚門」ウイキの「海龍王寺」によれば、「明治以降は境内の荒廢が進み、無住の時期が続いたが」、昭和二八(一九五三)年に「任職が著任し、堂宇の修理、境内の整備が行われた」とあり、すっかり莊嚴にして綺麗になってしまっている。辰雄が訪ねた当時の雰囲気は「東京紅團」の「堀辰雄の奈良を歩く」の「大和路編1」にある、岩波写真文庫「奈良―東部―」の写真で辛うじて想像出来る。特に『当時の海龍王寺の門前』のリンク写真をご覧になりたい。その下に辰雄とあなたと立たせてみるこそが本作を読む上では肝要であると思ふのである。因みにそこには、当時の海龍王寺の門前には何もなく、若草山(海龍王寺のほぼ東の四・五キロメートルにある)までも遠望出来たらしいとある。

「西金堂」海龍王寺公式サイトの「伽藍」によれば、『創建当時から建物』であり、鎌倉時代と昭和四十年から翌四十一年(一九六五、六年)にかけて『大きな修理を受けてはいるものの、一部に奈良時代の木材を残している』るもので、『規模や形式には大きな変更がなく、奈良時代に造られた小規模の堂はこの西金堂以外に現存していないことから非常に価値の高いものと評価されている』とある。現在は重要文化財指定を受けており、ウイキの「海龍王寺」によれば、『内部に五重小塔(国宝)を安置する。切妻造、本瓦葺き、正面』三間、側面二間の『小規模な仏堂である(ここでいう「間」は長さの単位ではなく、柱間の数を表す建築用語)。古代の仏堂で現存するものは、構造的に中心部の「身舎」(もや)と、その周囲の「庇」という』二つの部分から構成されるものが多いが、『この西金堂は「身舎」のみで「庇」にあたる部分がない、簡素な建物である。奈良時代の建物ではあるが、鎌倉時代に再建に近い大修理を受けており、奈良時代の部材はその多くが当初位置ではなく、堂内の他の場所に転用されている。創建時より規模や様式的は変更は無いと考えられている』とある。

「磚」塼・甃とも表記する。中国に於いて粘土を型で固めて焼くか、乾燥させて作った灰黒色の煉瓦をいう。漢代に発達して城壁・家屋・墓室の構築に用いられたが、日本にも伝来して飛鳥時代の寺院跡や鎌倉時代の唐様建築などに用いられた。…この最後の段落で私たちは、辰雄と連れ立って、「その廢寺」となった荒れた海龍王寺「の八重葎の茂った境内にはひつて往つて、みるかげもなく荒れ果てた小さな西金堂」「の中を、はづれかかつた櫺子ごしののぞ」き、「その天平好みの化粧天井裏を見上げたり、半ば剝落した白壁の上に描きちらされてある村の子供のらしい樂書を一っ一っ見たり、しまひには裏の扉口からそつと堂内に忍びこんで、磚のすき間から生えてゐる葎までも何か大事さうに踏まへて、こんどは反對に櫺子の中から明るい土のうへにくつきりと印せられてゐる松の木の影に見入つたりしながら」「小一時間ばかり」そこで過ごしてみた

くなるではないか。そうして……辰雄と同じように……私は……「女の来るのを待ちあぐねてゐる古の貴公子のやうにわれとわが身を描いたりし」てみたくなるのである……」

夕方、奈良への歸途

海龍王寺を出ると、村で大きな柿を二つほど買って、それを皮ごと噛りながら、こんどは佐紀山らしい林のある方に向つて歩き出した。「どうもまだまだ駄目だ。それに、どうしてかうおれは中世的に出来上がつてゐるのだらう。いくら天平好みの寺だといつたつて、こんな小つちやな寺の、しかもその廢頽した氣分に、こんなにうつつを抜かしてゐたのでは。……こんな事では、いつまで立つても萬葉氣分にはひれさうにもない。まあ、せいぜい何處やらにまだ萬葉の香りのうつすらと残つてゐる伊勢物語風なものぐらしいか考へられまい。もつと思ひきりうぶな、いきいきとした生活氣分を求めなくつては。……」そんなことを僕は柿を噛り噛り反省もした。

僕はすこし歩き疲れた頃、やつと山裾の小さな村にはいつた。歌姫といふ美しい字名だ。こんな村の名にしてはどうもすこし、とおもふやうな村にも見えたが、ちよつと意外だつたのは、その村の家がどれもこれも普通の農家らしく見えないのだ。大きな門構へのなかに、中庭が廣くとつてあつて、その四周に母屋も納屋も家畜小屋も果樹もならんでゐる。そしてその日あたりのいい、明るい中庭で、子どもが穀物などを一ぱいに揚げながらのんびりと働いてゐる光景が、ちよつとピサロの繪にでもありさうな構圖で、なんとなく佛蘭西あたりの農家のやうな感じだ。

ちよつとその中にはいつて往つて、女どもと、その村の聞きとりにくいやうな方言かなんかで話がしてみたかつたのだけれど、氣輕にそんなことの出来るやうな性分ならいい。僕ときたひには、そうやつて門の外からのぞいてゐるところを女どもにちらつと見とがめられただけで、もうそこには居たたまれない位になるのだからね。……

氣の小さな僕が、そうやつて農家の前に立ち止まり立ち止まり、二三軒見て歩いてゐるうちに、急に五六人の村の子たちに立ちよられて、怪訝さうに顔をじろじろ見られたしたのは往生した。そのあげく、僕はまるでそんな村の子たちに追はれるやうにして、その村を出た。

その村はづれには、おあつらへむきに、鎮守の森があつた。僕はとうとう追ひつめられるやうに、その森のなかに逃げ込み、その木蔭でやつと一息ついた。

「やぶちゃん注…「佐紀山」これは、海龍王寺門前の北方にある佐紀厩列古墳群のコンナベ古墳やウワナベ古墳一帯を指しているように思われる。

「せいぜい何處やらにまだ萬葉の香りのうつすらと残つてゐる伊勢物語風なものぐらしいか考へられまい」これはこの旅で構想され、後に書かれた「曠野」(同昭和一六(一九四一)年十二月『改造』に発表)の話柄と合致する。

「歌姫」現在の奈良市歌姫町。辰雄は海龍王寺を出ると、左折して北へ向かい、コナベ・ウワナベ古墳を遙かに見つつ、それらの古墳の手前、現在の法花寺北の交差点を左に折れ、平城宮跡を横切って、東西に走る県道一〇四号が南北に走る県道七五一号と交差する佐紀町交差点まで辿ったものらしい（海龍王寺門前からはここまで実測で一・五キロメートル）。ここから県道七五一号を一キロ弱真北へ向かった所に、この歌姫という村はあった。「南都銀行」の観光案内サイト「[ええ古都なら](#)」の「[歌姫街道](#) [古代の歌姫が暮らした街道](#)」に辰雄が辿ったこの南北の道について、以下のようにある。『京都府の木津川市へ向かうこの道は、かつては歌姫街道と呼ばれ、京都と奈良を結ぶ重要な交通路だった。壬申の乱で大友皇子の近江軍が飛鳥に攻めこむ際には、ここを越えきたといわれている。また平城京造営のときには、この街道を通って建築資材が運ばれた。歌姫街道とはなんともロマンチックな名前だが、平城宮で雅楽を奏し、舞を舞った女官たちがこの街道沿いに多く住まいしたため、この名前が付いたという。』『街道はずいぶんと開けたが、歌姫町のバス停を北へ過ぎた辺りから急に細くなり、古い民家が点在する。京へ向かい、街道がやや下り坂になったところに鎮座するのが、農業や旅の安全を守る神を祀る添御縣坐神社である。神社の前をさらに北へ過ぎると、道はカーブを描きながら下り、やがて広々とした田園風景となる』とある。……しかし、この日に辰雄が辿った地名の、何とことごとくが、美しい響きを持っていることだろう。奈良に疎い私でさえ、この地名だけで何かここからあくがれ出せるものがあるような気がするのである。……

「ピサロ」フランスの印象派の画家ジャコブ・カミーユ・ピサロ (Jacob Camille Pissarro 一八三〇年〜一九〇三年)。多くの農村を舞台と下風景画や人物画を描いている。[ブルー画像検索「Jacob Camille Pissarro」](#)を見られるがよい。辰雄の謂いがまことに、しっくりとくる。

「鎮守の森」これは位置的に見て、歌姫の集落の添御縣坐神社そうのみあがたにいますと思われる。この神社は大和平野中央を貫く古代の下つ道の北端に位置し、大和から旅する者が旅の安全を願ったところの、まさに国境——異界への通路——に鎮座する手向けの神として尊崇されてきたのである。

「村の子たちに追はれるようにして、その村を出」、「その村はづれに」ある「おあつらへむき」の「鎮守の森」がって、そこに「僕はとうとう追ひつめられるやうに、なかに逃げ込み、その木蔭でやつと一息ついた」という、この情景がまた、素晴らしいではないか！ これは子どもたちの時空を超えた鬼ごっこによって追われた詩人——神に選ばれた者——が、昼なお暗き古代の異界へと繋がるどころ、妖しい鎮守の森の奥へと誘われたのではあるまいか？……」

十月十三日、飛火野にて

けふは薄曇つてゐるので、何處へも出ずに自分の部屋に引き籠つたまま、きのふお前に送つてもらつた本の中から、希臘悲劇集をとりだして、それを自分の前に据ゑ、別にどれを読み出すといふこともなしにあちらこちら讀んでゐた。そのうち突然、そのなかの一つの場面が僕の心をひいた。舞臺は、アテネに近い、或る村はづれの森。苦しい流浪の旅をつづけてきた父と娘との二人づれが漸つといまその森まで辿りついたところ。盲ひた老人が自分の手をひいてゐる娘に向つて、「此處はどこだ」と聞く。旅やつれのした娘はそれでも老父を慰めるやうにこたへる。「お父う様、あちらにはもう都の塔が見えます。まだかなり遠いやうではございますが。ここでございますか、ここはなんだかかう神さびた森で。……」

老いたる父はその森が自分の終焉の場所であるのを豫感し、此處にこのまま止まる決心をする。

その神さびた森を前にして、その不幸な老人の最後の悲劇が起らうとしてゐるらしいのを讀みかけ、僕はおぼえず異様な身ぶるひをした。僕はしかしそのときその本をどちて、立ち上がった。このまま此の悲劇のなかにはひり込んでしまつては、もうこんどの自分の仕事はそれまでだとおもつた。……

かういふものを讀むのは、とにかくこんどの可哀らしい仕事がすんでからでなくては。——そう自分に言つてきかせながら、僕はホテルを出た。

もう十一時だ。僕はやつぱりこちらに來てゐるからには、一日のうちに何か一つぐらゐはいいものを見ておきたくなつて、博物館にはひり、一時間ばかり彫刻室のなかで過ごした。こんなときにひとつ何か小品で心愉しいものをじっくり味はひたいと、小型の飛鳥佛あすかぶつなどを丹念に見てまはつてゐたが、結局は一番ながいこと、ちやうど「やぶちゃん注：ママ」若い樹木が枝を擴げるやうな自然さで、六本の腕を一ぱいに擴げながら、何處か遙かなところを、何かをこらへてゐるやうな表情で、一心になつて見入つてゐる阿修羅王あしゅらわうの前に立ち止まつてゐた。なんといふうひうひしい、しかも切ない目ざしだらう。かういふ目ざしをして、何を見つめよとわれわれに示してゐるのだらう。

それが何かわれわれ人間の奥ぶかくにあるもので、その一心な目ざしに自分を集中させてゐると、自分のうちにおのづから故しれぬ郷愁のやうなものが生れてくる、——何かさういつたノスタルヂックなものさへ身におぼえ出しながら、僕はだんだん切ない氣もちになつて、やつとのことで、その彫像をうしろにした。それから中央の虚空藏菩薩こくうざうぼさつを遠くから見上げ、何かこらえへるやうに、黙つてその前を素通りした。

「やぶちゃん注：昭和一六（一九三二）年十月十三日（火曜）。この最後の阿修羅王（後注するようにこれは現在の興福寺の国宝館にある阿修羅像である）に対する素晴らしい感懐、「ちやうど若い樹木が枝を擴げるやうな自然さで、六本の腕を一ぱいに擴げながら、何處か遙かなところを、何かをこらへてゐるやうな表情で、一心になつて見入つてゐる阿修羅王」のそれは、「なんといふうひうひしい、しかも切ない目ざしだらう。か

ういふ目ざしをして、何を見つめよとわれわれに示してゐるのだらう」「それが何かわれわれ人間の奥ぶかくにあるもので、その一心な目ざしに自分を集中させてゐると、自分のうちにおのづから故しれぬ郷愁のやうなものが生れてくる」という絶妙のそれは、凡愚な私が若き日にここを訪れた際（当時の私は、何と未だ、この「十月」を読んでいない迂闊な男であった）、舐めるように、その全身を見た折りの感動と――不遜乍ら――美事に一致するものであった。そうしてまた、「――何かさういつたノスタルヂックなものさへ身におぼえ出しながら、僕はだんだん切ない氣もちになつて、やつとのこと、その彫像をうしろにした」という箇所は、私の偏愛する堀の「浄瑠璃寺の春」のエンディングの、同じ春日の森の中で主人公夫婦が馬酔木の花に出逢つたシークエンス、

*

突然、妻がいつた。

「なんだか、この馬酔木と、浄瑠璃寺にあつたのとは、すこしちがふんぢやない？
ここのは、こんなに眞つ白だけれど、あそこのはもつと房が大きくて、うつすらと紅味を帯びてゐたわ。……」

「さうかなあ。僕にはおんなじにしか見えないが……」僕はすこし面倒くささうに、妻が手ぐりよせてゐるその一枝へ目をやつてゐたが、「さういへば、すこし……」

さう言ひかけながら、僕はそのときふいと、ひどく疲れて何もかもが妙にぼおつとしてゐる心のうちに、けふの晝つかた、浄瑠璃寺の小さな門のそばでしばらく妻と二人でその白い小さな花を手にとりあつて見てゐた自分たちの旅すがたを、何んだかそれがずつと昔の日の自分たちのことでもあるかのやうな、妙なつかしきさでもつて、鮮やかに、蘇らせ出してゐた。

*

の、そのコーダをまさに『鮮やかに、蘇らせ出して』くれる名文であると、私は思うのである。

「飛火野」「とぶひの」と読む。奈良市の春日山の麓、春日神社（春日野町）一帯の春日野の一部を指し、春日野の別名としても使われる。名称は元明天皇の頃、ここに烽火台のろしが置かれたことに由来する。奈良国立博物館は奈良県奈良市登大路町にあるが、ここは春日神社の直近西北西一キロメートルの直近に位置している。

「そのなかの一つの場面」次の日記で「ソフォクレウス」と名を挙げている通り、これはギリシヤ三大悲劇詩人（他はアテナイのアイスキュロス及びエウリピデス）の一人、アテナイのソポクレス（Sophocles 紀元前四九六年頃～紀元前四〇五年頃 ソフォクレスとも表記する）の最晩年の悲劇「コロノスのオイディプス」の冒頭の部分である（ソポクレスの作品で完全な形で現存するものは、現代ではギリシヤ悲劇の最高峰とされる「オイディプス王」の他、「アイアス」「トラキスの女たち」「アンティゴネ」（オイディプス死後の後日譚）「エレクトラ」「ピロクテテス」の七篇のみである。なお、「コロノスのオイディプス」の初演はソポクレス死後二～五年後のこととされる。ここは新潮文庫

福田恆存訳「オイディプス王・アンティゴネ」の福田氏の解説に拠った)。堀は結局次の日記で本作をこの日の「午後」「結局」、「再びとりあげて、ずつと読んでしまった」と記し、そこに感懐を記しているので、ここでウイキの「コロノスのオイディプス」から梗概その他を引用しておきたい。本作は時系列では「オイディプス王」に続くもので、テーバイのかつての王オイディプスが、放浪の末、『アテナイ近郊のコロノスの森にたどり着いたところから始まり、オイディプスの死に到るまでを描く』。『運命に翻弄されたオイディプスは予言に従って復讐の女神エウメニデスの聖林に導かれ、そこを自らの墓所として望み、アテナイ王テセウスもこれを認めた。そしてこれを阻もうとする息子ポリュネイケスやテーバイの現在の王クレオンにもかかわらず、オイディプスはテセウスのみが見守る中』、『コロノスの地中深く飲み込まれていく』という展開で、先行する「オイディプス王」(初演・紀元前四三〇年〜同四三六年)、この「コロノスのオイディプス」、「アンティゴネ」(初演紀元前四四二年〜同四四一年。以上の初演推定は前掲の福田解題に拠った)の三作品が『テーバイ王家の悲劇として密接な関連があり、時に三部作として扱われる。が、上記のように成立年代からして話の順序とは一致せず、アイスキュロスが好んだとされる三部作形式とは異なるものである』。物語の『舞台は、盲目で年老いたオイディプスが娘であるアンティゴネーに手を引かれて登場するところから始まる。彼らは乞食をしながら放浪し、コロノスのエウメニデスの神域の近くまでたどり着いたのである。そこにやってきた男に尋ねると、そこが神域であるかわかり、自分はここを動かぬつもりであること、王に使いして欲しいことを告げる』。『そこにコロノスの老人たちに扮したコロスが登場、彼がオイディプスであることを告げられると、すぐに立ち去ることを要求する。これに彼が反論していると、そこに彼のもう一人の娘、イスメネーが現れる。故郷に残った彼女は、彼の息子たちが仲違いし、兄ポリュネイケスが追い出され、国外で味方を得たことを伝え、同時にオイディプスに関する神託が出たことを告げる。それによると、彼が死んだとき、その土地の守護神となるといふ。そのためオイディプスを追い出した王であるクレオンは彼を連れ戻し、国の片隅に留め置くことを考えているという。オイディプスは彼を追い出した町、そして彼が追い出されるのを止めなかった息子たちへの怒りを口にする。コロスは王がくるまでとりあえず彼を受け入れる旨を述べる』。『そこへ王テセウスがやってくる。彼はオイディプスの求めるものを問い、それに対してオイディプスは、自分の死後、ここに葬って欲しいこと、それによってこの地を守護することが出来ること、しかしクレオンと息子たちが自分を求めていることを述べる。王は彼を受け入れることを告げる』。『そこにクレオンが出現。丁寧な言葉でオイディプスに帰国を促す。しかしオイディプスはこれに反論、両者は次第に激高し、ついにクレオンは娘を奪ってゆく、すでに一人は捕らえ、次はこの娘だ、とアンティゴネーを引き立てる。オイディプスはコロスに助けを求め、コロスはクレオンを非難する。そこへテセウスが現れ、クレオンを非難し、娘たちを取り戻すことを宣言する。クレオンは捨てぜりふを残して退散、娘たちは取り戻される』。

『すると今度は社によそ者が来ているとの通報、オイディプスに会いたがっているという。オイディプスはそれが自分の息子であると判断して、会うのを拒否するが、周囲の説得で会う。するとそれはやはりポリュネイクスであった。彼は自分が祖国を追い出されたこと、ドリスのアルゴスが味方してくれ、祖国に戦を仕掛けること、そのためにオイディプスに自分についてもらい、守護者となって欲しいことを述べる。彼はこれを全く聞き入れず、おまえは兄弟の手にかかって死ぬであろうとの呪いの言葉を述べる。アントイゴネーもポリュネイクスに説いて祖国を攻撃しないように言うが聞き入れず、彼も立ち去る。』このとき、天は急に荒れ、雹が降り、雷が鳴り響く。オイディプスは自分の終わりが近いことに気がつき、テセウスを呼びにやる。テセウスがくると彼は娘たちの先に立って神域に入る。これに付き従ってテセウスと従者も姿を消す。『その後、使者が現れ、オイディプスの最後の一部始終を語り、彼が死んだことを告げる。その後は二人の娘による嘆きで劇は終わる。』この劇の一つの要点は「神との和解」である。オイディプスの伝説では、最初に示された神託がそもそも彼らの悲惨な運命を示すものであった。登場人物たちはそれぞれにそれを避けようと努力したにもかかわらず、すべてが実現してしまった。中でももっとも悲惨な運命を担ったのがオイディプスである。『ソフォクレスは神の道が人間ではどうにもならぬものであり、また神の采配は時に恐ろしく非情であることを書いてきた。しかし、この劇では神の側からオイディプスに対して和解が示されている。また、「オイディプス王」では自分の悲惨な運命を嘆くばかりであった主人公は、この劇では一貫して自己の正当性を主張する。父親を殺したのも正当防衛であったし、他の場合でもその時その時は最善の選択をした結果であり、そこに恥じるところはないと言いつつ切っている。一般的な伝説ではオイディプスの死にこのような話はないようで、それだけに詩人の思い入れが強く働いているとも考えられる』とある。

「飛鳥佛」奈良国立博物館公式サイトの「収蔵データベース」で二体の飛鳥仏、[観音菩薩立像](#)（飛鳥時代（白鳳期）七世紀作）と同時期の[観音菩薩立像](#)が見られる。

「阿修羅王」これは当時、奈良国立博物館に寄託・展示されていた知られた興福寺蔵の国宝阿修羅像である。[ブルーグル画像検索「興福寺阿修羅像」](#)をリンクしておく。そこで、各人の琴線に触れる視線をお探しにならしたい。

「虚空蔵菩薩」奈良国立博物館公式サイトの「収蔵データベース」の「[虚空蔵菩薩像](#)」をリンクしておく。この虚空蔵菩薩像は、仏力によって超絶した記憶力を祈念する求聞持法くもんじほうを表象する夢幻的なイメージを感じさせる凶像であるが、それを思うと私は、このシーンは、阿修羅像の切実な感懐に打たれ、この虚空蔵菩薩像の示す無限の功德をシンボルするその眼差しに違和感を覚えて避けたというのではなくして、まさに阿修羅の視線によって喚起された、「何かわれわれ人間の奥ぶかくにあるもので、その一心な目ざしに自分を集中させてみると、自分のうちにおのづから故しれぬ郷愁のやうなものが生れてくる、——何かさういつたノスタルヂックなもの」を「身におぼえ出しながら、

僕はだんだん切ない氣もちになつて、やつとのことと、その彫像をうしろにした」堀が、こ「の虚空藏菩薩を遠くから見上げ」た瞬間——我々にとつての記憶、思い出——とは、如何なるものかということに思い至つて、切なさがに感極まり、「何かこらえへるように、黙つてその前を素通り」せざるおえなくなつたのではなかつたか？ と、秘かに感じていたのである。……」

夜、寢床の上で

とうとう「やぶちゃん注」ママ。後も同じ。」一日中、薄曇つてゐた。午後もまたホテルに閉ぢこもり、仕事にもまだ手のつかないまま、結局、ソフォクレエスの悲劇を再びとり上げて、ずつと讀んでしまつた。

この悲劇の主人公たちはその最後の日まで何んといふ苦患に充ちた一生を送らなければならぬのだらう。しかも、さういふ人間の苦患の上には、なんの變ることもなく、ギリシアの空はほがらかに擴がつてゐる。その神さびた森はすべてのものを吸ひ込んでしまふやうな底知れぬ静かさだ。あたかもそれが人間の悲痛な呼びかけに對する神々の答へでもあるかのやうに。——

薄曇つたまま日が暮れる。夜も、食事をすまずと、すぐ部屋にひきこもつて、机に向ふ。が、これから自分の小説を考へようとすると、果して午後讀んだ希臘悲劇が邪魔をする。あらゆる艱苦を冒して、不幸な老父を最後まで救はうとする若い娘のりりしい姿が、なんとしても、僕の心に乗つてきてしまふ。自分も古代の物語を描かうといふなら、さういふ氣高い心をもつた娘のすがたをこそ捉まへようと努力しなくては。……

でも、さういふもの、さういつた悲劇的なものは、こんどの仕事ですんでからのことだ、こんど、こちらに滞在在中に、古い寺や佛像などを、勉強かたがた、僕が心愉しく書かうといふのには、やはり「小さき繪」位がいい。

まあ、最初のプランどほり、その位のものを中心に心かけることにして、僕は萬葉集をひらいたり埴輪の寫眞を竝べたりしながら、十二時近くまで起きてゐて、五つか六つぐらゐ物語の筋を熱心に立ててみたが、どれもこれも、いざ手にとつて仔細に見てみると、大へんな難物のやうに思へてくるばかりなので、とうとう觀念して、寢床にはいつた。

「やぶちゃん注」ソフォクレエスの悲劇「前条の私の「そのなかの一つの場面」のソポクレス作「コロノスのオイディプス」についての注を参照されたい。

「小さき繪」先行する「[十月十二日、朝の食堂で](#)」及び、その私の「Idyll」（イディル）の注を参照のこと。」

十月十四日、ヴェランダにて

ゆうべ「やぶちゃん注：ママ。」は少し寐られなかつた。さうして寐られぬまま、仕事のことを考へてゐるうちに、だんだんいくちがなくなつてしまつた。もう天平時代の小説などを工夫するのは止めた方がいいやうな氣がしてきた。毎日、かうして大和の古い村や寺などを見てゐたからつて、おいそれとすぐそれが天平時代そのままの姿をして僕の中に蘇つてくれるわけではないのだもの。それには、もうすこし僕は自分の土臺をちやんとしておかなくては。古代の人々の生活の状態なんぞについて、いまみたいほんの少ししか、それも殆ど切れ切れにしか知つていないやうでは、その上で仕事をするのがあぶなつかしくつてしようがない。それは、ここ數年、何かと自分の心をそちらに向けて勉強してきたこともしてきた。だが、あんな勉強のしかたでは、まだまだ駄目なことが、いま、かうやつてその仕事に實地にぶつかつて見て、はつきり分かつたといふものだ。ほんの小手しらのやうな氣もちでとり上げようとした小さな仕事さへ、こんなに僕を手きびしくはねつけるのだ。僕はこのままそれに抵抗していても無駄だらう。いさぎよく引返して、勉強し直してきた方がいい。……

そんな自棄ぎみな結論に達しながら、僕はやつと明け方になつてから寐入つた。

それで、けさは大いに寐坊をして、髭も剃らずに、やつと朝の食事に間に合つた位だ。

けふはいい秋日和だ。かういふすがすがしい氣分になると、又、元氣が出てきて、もう一日だけ、なんとか頑張つてやらうといふ氣になつた。やや寐不足のやうだが、小説なんぞ考へるのには、さういふ頭の狀態の方がかへつて幻覺的でいいこともある。

どうも心細い事を云ひ初めたものだど、お前もこんな手紙を見ては氣が氣でないだらう。だが、もう少し辛抱をして、次ぎの手紙を待つてゐてくれ。何處でそれを書く事になるか、まだ僕にも分からない。……

「やぶちゃん注：昭和一六（一九四一）年十月十四日（水曜）。」

午後、秋篠寺にて

いま、秋篠寺といふ寺の、秋草のなかに寐そべつて、これを書いてゐる。いましがた、ここのすこし荒れた御堂にある伎藝天女の像をしみじみと見てきたばかりのところだ。このミュウズの像はなんだか僕たちのもののやうな氣がせられて、わけてもお慕はしい朱い髪をし、おほどかな御顔だけすつかり香にお灼けになつて、右手を胸のあたりにもちあげて軽く印を結ばれながら、すこし伏せ目にこちらを見下ろされ、いまにも何かおつしやられさうな様子をなすつてお立ちになつてゐられた。……

此處はなかなかいい村だ。寺もいい。いかにもそんな村のお寺らしくしてゐるところがいい。さうしてこんな何氣ない御堂のなかに、ずつと昔から、かういふ匂ひの高い天女の像が身をひそませてゐてくださつたのかとおもふと、本當にありがたい。

「やぶちゃん注…「秋篠寺」奈良市秋篠町、奈良市街地の北西、西大寺北方に位置する単立寺院。本尊は薬師如来。開基は奈良時代の法相宗の僧善珠とされる。次に出る伎芸天立像と国宝の本堂で知られるが、保延元（一一三五）年に火災によって講堂以外の主要伽藍を焼失しており、現存する本堂も旧講堂の位置に建つものの、創建当時のものではなく鎌倉期に再建されたもので、金堂や東西両塔の跡などは雑木林となっている（[上は主にウイキの「秋篠寺」に拠る](#)）。

「伎藝天女」[グーグル画像検索「秋篠寺 伎芸天」](#)。木造で像高二百六センチメートル、本堂仏壇の向かって左端に立っている。現在、重要文化財。[ウイキの「秋篠寺」](#)によれば、伝伎芸天立像とされて、「瞑想的な表情と優雅な身のこなしで多くの人を魅了してきた像である。頭部のみが奈良時代の脱活乾漆造、体部は鎌倉時代の木造による補作だが、像全体としては違和感なく調和している。「伎芸天」の彫像の古例は日本では本像以外にほとんどなく、本来の尊名であるかどうかは不明である」とある。

「おほどかな」おっとりしているさま。おおらかだ。鷹揚で物静かなさま。」

夕方、西の京にて

秋篠あきしのの村はづれからは、生駒山が丁度いい工合に眺められた。

もうすこし昔だと、もつと佗びしい村だつたらう。何か平安朝の小さな物語になら、その背景には打つてつけに見えるが、それだけに、此處もこんどの仕事には使へさうもないとあきらめ、ただ伎藝天女と共にした幸福なひとときをけふの收穫にして。僕はもう何をしようといふあてもなく、秋篠川に添うて歩きながら、これを往けるところまで往つて見ようかと思つたりした。

が、道がいつか川と分かれて、ひとりでさいだいじに西大寺驛に出たので、もうこれまでと思ひ切つて、奈良行の切符を買つたが、ふいと氣がかはつて郡山行の電車に乗り、西の京で下りた。

西の京の驛を出て、薬師寺の方へ折れようとするにつつきに、小さな切符賣場を兼ねて、古瓦のかけらなどを店さきに竝べた、佗びしい骨董店がある。いつも通りすがりに、ちよつと氣になつて、その中をのぞいて見るのだが、まだ一ぺんもはいつて見たことがなかつた。が、けふその店の中に日があかるくさしこんでゐるのを見ると、ふいとその中にはひつてみる氣になつた。何か埴輪でくの土偶でくのやうなものでもあつたら欲しいと思つたのだが、そんなものでなくとも、なんでもよかつた。ただふいと何か仕事の手がかりになりさうなものがそんな店のがらくたの中にころがつてゐはすまいかといふ空頼みもあつたのだ。だが、そこで二十分ばかりねばつてみてゐたが、からくさもやう唐草文様などの工合のいい古瓦のかけらの他にはこれといつて目ぼしいものも見あたらなかつた。なんぼなんでも、そんな古瓦など買った日には重くつて、持てあますばかりだらうから、又こんど來ることにして、何も買はずに出た。

裏山のかげになつて、もうここいらだけ眞先きに日がかげつてゐる。薬師寺の方へ向つてゆくと、そちらの森や塔の上にはまだ日が一ぱいにあたつてゐる。

荒れた池の傍をとほつて、講堂の裏から薬師寺にはひり、金堂や塔のまほりをぶらぶらしながら、ときどき塔の相輪さうりんを見上げて、その水煙のなかに透すかし彫ぼりになつて一人の天女の飛翔しつつかある姿を、どうしたら一番よく捉まへられるだらうかと角度など工夫して見てゐた。が、その水煙のなかにさういふ天女を彫り込むやうな、すばらしい工夫を凝らした古人に比べると、いまどきの人間の工夫しようとしてゐる事なんぞは何んと間が抜けてゐることだと氣がついて、もう止める事にした。

それから僕はもと來た道を引つ返し、すつかり日のかげつた築土道ついちを北に向つて歩いていつた。二三度、うしろをふりかへつてみると、松林の上にその塔の相輪だけがいつまでも日に赫あざいてゐた。

裏門を過ぎると、すこし田圃があつて、そのまほりに黄いろい粗壁の農家が數軒かたまつてゐる。それが五條ごじょうといふ床あざなしい字名の残つてゐる小さな部落だ。天平の頃には、恐らくここいらが西の京の中心をなしてゐたものと見える。

もうそこがすぐ唐招提寺の森だ。僕はわざとその森の前を素どほりし、南大門も往き過ぎて、なんでもない木橋の上に出ると、はじめてそこで足を止めて、その下に水草を茂らせながら氣もちよげに流れてゐる小川にぢいつと見入りだした。これが秋篠川のつづきなのだ。

それから僕は、東の方、そこいら一帯の田圃ごしに、奈良の市のあたりにまだ日のあつてゐるのが、手にとるやうに見えるところまで歩いて往つてみた。

僕は再び木橋の方にもどり、しばらくまた自分の仕事のことなど考へ出しながら、すこし氣が鬱ふさいで秋篠川にそつて歩いてゐたが、急に首をふつてそんな考へを拂ひ落し、せつかくこちらに來てゐて随分ばかばかしい事だと思ひながら、裏手から唐招提寺の森のなかへはひつていつた。

金堂こんだうも、講堂も、その他の建物も、まはりの松林とともに、すつかりもう陰つてしまつてゐた。さうして急にひえびえとした夕暗のなかに、白壁だけをあかるく残して、軒も、柱も、扉も、一様に灰ばんだ色をして沈んでゆかうとしてゐた。

僕はそれでもよかつた。いま、自分たち人間のはかなさをこんなな心にしみて感じてゐられるだけでよかつた。僕はひとりで金堂の石段にあがつて、しばらくその吹き放しの圓柱のかげを歩きまはつてゐた。それからちよつとその扉の前に立つて、このまへ來たときはじめて氣がついたいくつかの美しい花文くわもんを夕暗のなかに捜して見た。最初はただそこいらが數箇所、何かが剝けてでもしまつた跡のやうな工合にしか見えないでゐたが、ぢいつと見てゐるうちに、自分がこのまへに見たものをそこにいま思ひ出してゐるのに過ぎないのか、それともそれが本當に見え出してきたのかどちらか、よく分からないう位の仄かさで、いくつかの花文がそこにぼおつと浮かび出してゐた。……

それだけでも僕はよかつた。何もしないで、いま、ここにかうしてゐるだけでも、僕

は大へん好い事をしてゐるやうな気がした。だが、かうしてゐる事が、すべてのものはかなく過ぎてしまふ僕たち人間にとつて、いつまでも好いことではあり得ないことも分かつてゐた。

僕はけふはもうこの位にして、此處を立ち去らうと思ひながら、最後にちよつとだけ人間の氣まぐれを許して貰ふやうに、圓柱の一つに近づいて手で撫でながら、その太い柱の真んなかのエンタシスの工合を自分の手のうちにしみじみと味ははうとした。僕はそのときふとその手を休めて、ちつと一つところにそれを押しつけた。僕は異様に心が躍つた。さうやつてみてゐると、夕冷えのなかに、その柱だけがまだ温かい。ほんのりと温かい。その太い柱の深部に滲しみ込んだ日の光の温かみがまだ消えやらずに残つてゐるらしい。

僕はそれから顔をその柱にすれすれにして、それを嗅かいでみた。日なたの匂ひまでもそこには幽かに残つてゐた。……

僕はさうやつて何んだか氣の遠くなるやうな數分を過ごしてゐたが、もうすつかり日が暮れてしまつたのに氣がつくと、やうやつと金堂から下りた。さうして僕はその儘、自分の何處かにまだ感ぜられてゐる異様な温かみと匂ひを何か貴重なもののやうにかかへながら、既に眞つ暗になりだしてゐる唐招提寺の門を、いかにもさりげない様子をして立ち出でた。

「やぶちゃん注…以上で「十月」の「一」が終わる。

「秋篠川に添うて歩きながら、これを往けるところまで往つて見ようかと思つたりした」「が、道がいつか川と分かれて、ひとりで西大寺驛に出た」推定ルートを実測してみると、辰雄は凡そ二キロメートルほど歩いてゐる。

「侘びしい骨董店」「東京紅團」の「堀辰雄の奈良を歩く」の「大和路編2」の探勝によれば、既に現存しない。

「裏山のかげになつて」現在の画像を見る限りでは、近畿橿原線の「西の京」駅付近には、夕陽を遮るような山が現認出来ない。現在の西方にある六条一帯が当時は丘状をなしていたものか？

「講堂の裏から薬師寺にはひり」西の京駅から東に向かうと、現在の薬師寺の観光用入場門である興楽門に行き著ぎ、ここを入ると、まさに正しく「講堂の裏手」である。なお、「東京紅團」の「堀辰雄の奈良を歩く」の「大和路編2」によれば、この時、辰雄が実見した金堂や講堂は江戸後期に仮再建したもので、創建当時の伽藍は焼け残った東塔だけあったとある。第二次世界大戦後に同寺は順次再建がなされており、この時に辰雄が見た薬師寺の建物で現在残っているのは東塔のみである旨、記されてある。

「その水煙のなかにさういふ天女を彫り込むやうな、すばらしい工夫を凝らした古人に比べると、いまどぎの人間の工夫しようとしてゐる事なんぞは何んと間が抜けてゐることだ」ここには辰雄の精一杯の世相批判が滲んでゐるように私には思われる。この昭和一

六（一六四一）年の五月には日本軍が重慶を爆撃し、七月二十八日、フランス領インドシナ南部に日本軍が進駐、九月二十八日にはサイゴンに上陸していた。この四日後の十月十八日には十六日の近衛内閣総辞職を受け、東條英機が内閣総理大臣となって東條内閣を組閣、二ヶ月後の十二月八日、遂に日本軍のマレー半島上陸及び真珠湾攻撃によって太平洋戦争が勃発、日本は対米英に宣戦布告するのであった。

「裏門を過ぎると、すこし田圃があつて、そのまはりに黄いろい粗壁の農家が數軒かたまつてゐる。それが五條といふ床しい字名の残つてゐる小さな部落だ。天平の頃には、恐らくここいらが西の京の中心をなしてゐたものと見える」「裏門」とは先に示した現在の興楽門で、そこから北に真つ直ぐ唐招提寺に向かう道がある。唐招提寺の西南の角まで凡そ五百四十メートルほどで、このルートの中間地点から北部分が「五條」（現在の五条町）である。

「なんでもない木橋」前述の位置から真東に進むと、二百七十メートルほどで秋篠川にぶつかる。そこに架かるのは下極楽橋であるが、これか？

「それから僕は、東の方、そこいら一帯の田圃ごしに、奈良の市のあたりにまだ日のあつてゐるのが、手にとるやうに見えるところまで歩いて往つてみた」先の下極楽橋から真東に七百メートルほどが現在の五条町の東域内である。

「裏手から唐招提寺の森のなかへはひつていった」下極楽橋から北へ四十六メートルほど北上すると、左に折れて、唐招提寺の鎮守社水鏡天神社の南から唐招提寺に入るルートがある。

「僕はひとりで金堂の石段にあがつて、しばらくその吹き放はなしの圓柱のかげを歩きまはつてゐた。それからちよつとその扉の前に立つて、このまへ来たときはじめて氣がついたいくつかの美しい花文を夕暗のなかに捜して見た。最初はただそいらが數箇所、何かが剥げてでもしまつた跡のやうな工合にしか見えないであつたが、ぢいつと見てゐるうちに、自分がこのまへに見たものをそこにいま思ひ出してゐるのに過ぎないのか、それともそれが本當に見え出してきたのか、どちらかよく分からない位の仄かさで、いくつかの花文がそこにぼつと浮かび出してゐた。……」「それだけでも僕はよかつた。何もしないで、いま、ここにかうしてゐるだけでも、僕は大へん好い事をしてゐるやうな氣がした。だが、かうしてゐる事が、すべてのものがはかなく過ぎてしまふ僕たち人間にとつて、いつまでも好いことではあり得ないことも分かつてゐた」以下、この日の辰雄のクライマックスと言つてよい。これは十月十一日の記載を再度、同じ場所と同じ夕景の中に立ち昇らせる美しい孤愁の幻視シークエンスである。

「僕はけふはもうこの位にして、此處を立ち去らうと思ひながら、最後にちよつとだけ人間の氣まぐれを許して貰ふやうに、圓柱の一つに近づいて手で撫でながら、その太い柱の真んなかのエンタシスの工合を自分の手のうちにしみじみと味ははうとした。僕はそのときふとその手を休めて、ぢつと一つところにそれを押しつけた。僕は異様に心が躍つた。さうやつてみてゐると、夕冷えのなかに、その柱だけがまだ温かい。ほんのり

と温かい。その太い柱の深部に滲しみ込こんだ日の光の温かみがまだ消えやらずに残つてゐるらしい」「僕はそれから顔をその柱にすれすれにして、それを嗅かいでみた。日なたの匂ひまでもそこには幽かに残つてゐた。……」私は思うのだが、堀辰雄には稀に見る高雅なフェティシズムがあるように感じている。それはしかし、例えば同じ宿痾の詩人であつた梶井基次郎の「檸檬」のような、病的な露悪的熱感とは無縁なもので、確かな人の肌の温もりにダイレクトに繋がる不思議な郷愁なのである。ここではそれが如何なく発揮されて、しかもその時空間を軽々と超えて行く辰雄の意識が、ここではそうした触覚のみならず、嗅覚としても意識されてくるという、全感的な幻視者の希有なエクスタシーとして読者に共感されるのである。」

二

十月十八日、奈良ホテルにて

けふは雨だ。一日中、雨の荒池あらいけをながめながら、折口博士の「古代研究」などを讀んでゐた。

そのなかに人妻となつて子を生んだ葛くずの葉はといふ狐の話をとり上げられた一篇があつて、そこにかういふ挿話が語られてゐる。或る秋の日、その葛の葉が童子をあやしなから大好きな亂菊の花の咲きみだれてゐるのに見とれてゐるうちに、ふいと本性に立ち返つて、狐の顔になる。それに童子が氣がつき急にこはがつて泣き出すと、その狐はそれつきり姿を消してしまふ、といふことになるのだが、その亂菊の花に見入つてゐるその狐のうつとりとした顔つきが、何んとも云へず美しくおもへた。それもほんの一とほりの美しさなんぞではなくて、何かその奥ぶかくに、もつともつと思ひがけないものを潜めてゐるやうにさへ思はれてならなかつた。

僕も、その狐のやつに化かされ出してゐるのでないといいが……

「やぶちゃん注…」の最後が十月十四日であるが、個人サイト「タツノオトシゴ」の「年譜」によれば、十月十五日には京都に出かけ、円山公園で「いもぼう」を食べ、出町柳の古本屋で掘り出し物を探し、十六日は小説構想のために一日奈良ホテルに籠っている。翌十七日には再び京都へ出て、高瀬川に沿って歩きながら寺町通りへ向かい、古本屋を二時間ほど涉獵の末、求めていた「今昔物語集」入手したが、その帰途、京都駅で乗り換えた電車を誤り（櫃原行）、郡山まで行ってしまったとある。

『折口博士の「古代研究」』これは折口信夫の「古代研究 民俗学篇第一」で、昭和四

(一九二九)年四月十日大岡山書店刊行。ここで辰雄の語っているのはその中の「信太妻の話」である(この論文自体の初出は大正一三(一九二四)年四・六・七月の『三田評論』)。辰雄がイメージを飛ばしたシークエンスはその第一章に出る。やや長いが冒頭第一章総てを引用しておく。底本は所持する中公文庫版折口信夫全集第二巻(昭和五〇(一九七五)年刊)の正字正仮名版を用いた。踊り字「く」「ぐ」は正字化した。段落冒頭の一字下げのないのは底本のママである。なお、この信太は和泉国和泉郡、現在の大阪府和泉市の信太山丘陵の北部一帯に広がっていたと考えられており、同市葛の葉町には本伝説所縁の信太森葛葉稻荷神社が鎮座する(グーグル・マップ・データ)。

《引用開始》

今から二十年前、特に青年らしい感傷に耽りがちであつた當時、私の通つて居た學校が、靖國神社の近くにあつた。それで招魂祭にはよく、時間の間を見ては、行き行きしたものだ。今もあるやうに、其頃からあの馬場の北側には、猿芝居がかゝつてゐた。ある時這入つて見ると「葛の葉の子別れ」といふのをしてゐる。猿廻しが大した節廻しもなく、さうした場面の抒情的な地の文を謠ふに連れて、葛の葉狐に扮した猿が、右顧左眊の身ぶりをする。

「あちらを見ても山ばかり。こちらを見ても山ばかり。」何でもさういつた文句だつたと思ふ。猿曳き特有のあの陰惨な聲が、若い感傷を誘うたことを、いまだに覚えてゐる。平野の中に横たはつてゐる丘陵の信太山^{シノダヤマ}。其を見馴れてゐる私どもにとつては、山又山の地方に流傳すれば、かうした妥當性も生じるものだといふ事が、始めて悟れた。個人の經驗から言つても、それ以來、信太妻傳説の背景が、二様の妥當性の重ね寫眞になつて來たことは事實である。今人の信太妻に關した知識の全内容になつてゐるのは、竹田出雲の「蘆屋道満大内鑑」といふ淨瑠璃の中程の部分なのである。

戀人を死なして亂心した安倍ノ安名が、正氣に還つて來たのは、信太^{シノダ}の森である。狩り出された古狐が逃げて來る。安名が救うてやつた。亡き戀人の妹葛の葉姫といふのが來て、二人ながら幸福感に浸つてゐると、石川悪右衛門といふのが現れて、姫を奪ふ。安名失望の極、腹を切らうとすると、先の狐が葛の葉姫に化けて來て留める。安名は都へも歸られない身の上とて、攝津國安倍野といふ村へ行つて、夫婦暮しをした。その内子供が生れて、五つ位になるまで何事もない。子供の名は「童子丸^{ドウジマル}」と言つた。葛の葉姫の親「信太ノ莊司」は、安名の居處が知れたので實の葛の葉を連れて、おしかけ嫁に來る。來て見ると、安名は留守で、自分の娘に似た女が布を織つてゐる。安名が會うて見て、話を聞くと、訣らぬ事だらけである。今の女房になつてゐるのが、いかにも怪しい。さう言ふ話を聞いた狐葛の葉は、障子に歌を書き置いて、逃げて了ふ。名高い歌で、訣つた様な訣らぬ様な

戀しくば、たづね來て見よ。和泉なる信太の森の うらみ葛の葉

なんだか互爾波のあはぬ、よく世間にある狐の筆蹟とひとつで、如何にも狐らしい歌である。其後、あまりに童子丸が慕ふので、信太の森へ安名が連れてゆくと、葛の葉が出

て来て、其子に姿を見せるといふ筋である。

狐子別れは、近松の「百合若大臣野守鏡」を模寫したとせられてゐるが、近松こそ却つて、信太妻の説經あたりの影響を受けたと思ふ。近松の影響と言へば「三十三間堂棟木ノ由來」などが、それであらう。出雲の外にも、此すこし前に紀ノ海音が同じ題材を扱つて「信太ノ森女ヲシナウラカタ占」といふ淨瑠璃を拵へて居る。此方は、さう大した影響はなかつた様である。

信太妻傳説は「大内鑑」が出ると共に、ぴつたり固定して、それ以後語られる話は、傳説の戯曲化せられた大内鑑を基礎にしてゐるのである。其以外に、違つた形で傳へられてゐた信太妻傳説の古い形は、皆一つの異傳に繰り込まれることになる。言ふまでもなく、傳説の流動性の豊かなことは、少しもちつとして居らず、時を経てだんだん伸びて行く。しかも何處か似よりの話は、其似た點からとり込まれる。併合は自由自在にして行くが、自分たちの興味に關係のないものは、何時かふり落してしまふといつた風にして、多趣多様に變化して行く。

さう言ふ風に流動して行つた傳説が、ある時にある脚色を取り入れて、戯曲なり小説なりが纏まると、其が其傳説の定本と考へられることになる。また、世間の人の其傳説に關する知識も限界をつけられたことになる。其作物が世に行はれれば行はれるだけ、其勢力が傳説を規定することになつて来る。長い日本の小説史を顧ると、傳説を固定させた創作が、だんだんくづされて傳説化していつた事實は、ざらにあることだ。

大内鑑の今一つ前の創作物にあたつて見ると、角太夫節の正本に、其がある。表題は「信太妻シノタツメ」である。併しこれにも、尙今一つ前型があるので、その正本はどこにあるか訣らないが、やはり同じ名の「信太妻」といふ説經節の正本があつたやうである。「信太妻」の名義は信太にゐる妻、或は信太から來た妻、どちらとも考へられよう。角太夫の方の筋を抜いて話すと、大内鑑の様に、信太の莊司などは出て來ず、破局の導因が極めて自然で、傳説其儘の様な形になつてゐる。

或日、葛の葉が縁側に立つて庭を見てゐると、ちようど秋のことで、菊の花が咲いてゐる。其は、狐の非常に好きな亂菊といふ花である。見てゐるうちに、自然と狐の本性が現れて、顔が狐になつてしまつた。そばに寝てゐた童子ドウジが眼を覺まして、お母さんが狐になつたと怖がつて騒ぐので、葛の葉は障子に「戀しくば」の歌を書いて、去つてしまふ。子供が慕ふので、安名が後を慕うて行くと、葛の葉が姿を見せたといふ。此邊は大體同じことであるが、その前後は、餘程變つてゐる。海音・出雲が角太夫節を作り易へた、といつた様に聞えたかも知れないが、實は説經節の影響が直接になければならぬはずだ。

内容は數次の變化を経てゐるけれど、説經節では其時々トキトキの主な語り物を「五説經」と唱へて、五つを勘定してゐる。いつも信太妻が這入つてゐる處から見ると、此淨瑠璃は説經としても、重要なものであつたに違ひない。それでは、説經節以前が、傳説の世界に入るものと見て宜しいだらうか。一體名高い説經節は、恐らく新古の二種の正本のあつ

たものと考へる。古曲がもてはやされた處から、多少複雑な脚色をそへて世に出たのが、刊本になつた説經正本であらう。

《引用終了》

老婆心乍ら、この子供（幼名自体を「童子丸」とする）こそが後の陰陽師のチャンピオン安倍晴明で、後に父の汚名（冤罪による失脚という設定が別伝承にある）を晴らして安倍家再興を果たすというストーリーが続く。以下「信太妻の話」は伝承起源を民俗学的に遡って自在に沖繩にまで飛んでゆく、かの独特の折口節が続くのであるが、第二章の最後で折口は『子供の無邪氣な驚愕が、慈母の破滅を導くと言ふ形の方が、古くて作意を交へないものに違ひない』と述べており、まさにここでこそ辰雄は、その無邪氣な童子の網膜となつて正しく狐の母の顔を見ていることに気づきたい。そうして同時にそれが、まさに『慈母の破滅を導く』という致命的な安定世界の崩壊を導くことに強い文学的興味を惹起させられている点も含めて、である。』

十月十九日、戒壇院の松林にて

けふはまたすばらしい秋日和だ。午前中、クロオデルの「マリアへのお告げ」を読んだ。

數年まへの冬、雪に埋もれた信濃の山小屋で、孤獨な氣もちで讀んだものを、もう一遍、こんどは秋の大和路の、何處かあかるい空の下で、讀んでみたくて携へてきた本だが、やつとそれを讀むのにいい日が來たわけだ。

雪の中で、いまよりかずつと若かつた僕は、この戯曲を手にながら、そこに描かれてゐる一つの主題——神的なもの、人間性のなかへの突然の訪れといったやうなもの——を、何か一枚の中世風な受胎告知圖を愛するやうに、素朴に愛してゐることができた。いまも、この戯曲のさういふ抒情的な美しさはすこしも減じていない。だが、こんどは讀んでゐるうちにいつのまにか、その女主人公ヴィオレヌの惜しげもなく自分を與へる餘りの純真さ、さうしてゐるうちに自分でも知らず識らず神にまで引き上げられてゆく驚き、その心の葛藤、——さういつたものに何か胸をいつばいにさせ出してきた。

三時ごろ讀了。そのまま、僕は何かちつとしてゐられなくなつて、外に出た。

博物館の前も素どほりして、どこへ往くといふこともなしに、なるべく人けのない方へ方へと歩いてゐた。かういふときには鹿なんでもまつびらだ。

戒壇院かいだんいんをとり圍んだ松林の中に、誰もいないのを見ますと、漸つと其處に落ちついて、僕は歩きながらいま讀んできたクロオデルの戯曲のことを再び心に浮かべた。さうしてこのカトリックの詩人には、ああいふ無垢な處女を神へのいけにへにするために、ああも彼女を孤獨にし、ああも完全に人間性から超絶せしめ、それまで彼女をとりまいてゐた平和な田園生活から引き離すことがどうあつても必然だつたのであらうかと考

へて見た。さうしてこの戯曲の根本思想をなしてゐるカトリック的なもの、ことにその結末における神への讚美のやうなものが、この静かな松林の中で、僕にはだんだん何か異様なものにおもへて来てならなかつた。

「やぶちゃん注」『クロオデルの「マリアへのお告げ」』フランスの外交官で劇作家・詩人のポール＝ルイ＝シャルル・クロードル (Paul-Louis-Charles Claudel Claudel 一八六八年～一九五五年) が一八九二年に発表した戯曲「乙女ヴィオレーヌ」(La Jeune Fille Violaine 初演(二校版による)は一九五九年) を一九一二年に改作した「マリアへのお告げ」(L'Annonce faite à Marie 同年初演)。私は未読であるが、[こちら](#)に登場人物と簡単な梗概が出る。

「戒壇院」東大寺戒壇堂。天平勝宝六(七五四)年に聖武上皇が光明皇太后らとともに唐から渡来した鑑真和上から戒を授かったが、翌年、日本初の正式な授戒の場としてここに戒壇院を建立した。当時は戒壇堂・講堂・僧坊・廻廊などを備えていたが、江戸時代までに三度火災で焼失、戒壇堂と千手堂だけが復興されている(以上は[東大寺公式サイト](#)に拠る)。現在の建物は享保一八(一七三三)年の再建で、内部には中央に法華經見宝塔品の所説に基づく宝塔が安置され、その周囲を塑造四天王立像(国宝)が守る。[ウィキの「東大寺」](#)によれば、この四天王像は『法華堂の日光・月光菩薩像および執金剛神像とともに、奈良時代の塑像の最高傑作の一つ。怒りの表情をあらわにした持国天、增長天像と、眉をひそめ怒りを内に秘めた広目天、多聞天像の対照が見事である。記録によれば、創建当初の戒壇院四天王像は銅造であり、現在の四天王像は後世に他の堂から移したものである』とある。私は教え子に連れられて初めてここに行き、その教え子の好きだという広目天像に親しく接し、痛く魅入られたことが忘れられない。」

三月堂の金堂にて

がつくわう 月光菩薩像。そのまへにちつと立つてゐると、いましがたまで木の葉のやうに散らばつてゐたさまざまな思念ごとそつくり、その白みがかつた光の中に吸ひこまれてゆくやうな氣もちがせられてくる。何んといふ慈しみの深さ。だが、この目をほそめて合掌をしてゐる無心さうな菩薩の像には、どこか一抹の哀愁のやうなものが漂つており、それがこんなにも素直にわれわれを此の像に親しませるのだといふ氣のするのは、僕だけの感じであらうか。……

一日ぢゆう、たえず人間性への神性のいどみのやうなものに苦しませられてゐただけ、いま、この柔かな感じの像のまへにかうして立つてゐると、さういふことがますます痛切に感ぜられてくるのだ。

「やぶちゃん注」個人サイト「タツノオトシゴ」の「[年譜](#)」によれば、本パートの原形

と思われる多恵子夫人への手紙は、実際には三月堂（東大寺法華堂の通称）ではなく、そこから七百メートルほど南下した万葉植物園で認められたものらしい。

「月光菩薩像」当時は東大寺法華堂に安置されていたもので、現在は同寺の東大寺総合文化センター内に展示されている奈良時代の国宝塑造日光・月光菩薩立像の一体。元は法華堂本尊不空羅索観音の両脇であった。参照したウィキの「東大寺」によれば、『天平彫刻の代表作として著名だが、造像の経緯等は定かでない、本来の像名も不明である（「日光・月光菩薩」という名称は後世に付けられたもので、本来は、薬師如来の脇侍となる菩薩）。像の表面は現状ほとんど白色だが、製作当初は彩色像であった。本来の像名は梵天・帝釈天だった、とする説もある』とある。ウィキの「東大寺法華堂」にある同月光菩薩立像の画像をリンクしておく。』

十月二十日夜

けふははじめて生駒山いこまやまを越えて、河内の國高安たかやすの里のあたりを歩いてみた。山の斜面に立つた、なんとなく寒さむとした村で、西の方にはずつと河内の野が果てしなく擴がつてゐる。

ここから二つ三つ向うの村には名だかい古墳群などもあるさうだが、そこまでは往つて見なかつた。さうして僕はなんの取りとめもないその村のほとりを、いまは山の向う側になつて全く見えなくなつた大和の小さな村々をなつかしさうに思ひ浮かべながら、ほんの一時間ばかりさまよつただけで、歸つてきた。

こなひだ秋篠あきしのの里からゆふがた眺めたその山の姿になにか物語めいたものを感じてゐたので、ふと氣まぐれに、そこまで往つてその昔の物語の匂ひをかいできただけのこと。（さうだ、まだお前には書かなかつたけれど、僕はこのごろはね、伊勢物語なんぞの中にもこつそりと探りを入れてゐるのだよ。……）

夕方、すこし草臥れてホテルに歸つてきたら、廊下でばつたり小説家のA君に出逢つた。ゆうべ遅く大阪からこちらに著ぎ、けふは法隆寺へいつて壁畫の模寫などを見てきたが、あすはまた京都へ往くのだといつてゐる。連れがふたりゐた。ひとりはその壁畫の模寫にたづさはつてゐる奈良在住の畫家で、もうひとりとは京都から同道の若き哲學者である。みんなと一しよに僕も、自分の仕事はあきらめて、夜おそくまで酒場で駄辨つてゐた。

「やぶちゃん注」：「高安」大阪府八尾市高安。言わずもがなであるが、「伊勢物語」第二十三段の「筒井筒」として人口に膾炙する章段に登場する地名である。煩を厭わず引いておく。底本は角川文庫版石田穰二訳注「新版 伊勢物語」を用いたが（一部読点を追加した）、恣意的に正字化した。

*

昔、みなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいでて遊びけるを、大人になりければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めと思ふ、女はこの男をと思ひつつ、親のあはすれども、聞かでないありける。さて、このとなりの男のもにより、かくなむ、

筒井つの井筒にかけしまろがたけ

過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩過ぎぬ

君ならずして誰かあぐべき

など言ひ言ひて、つひに本意のごとくあひにけり。

さて、年ごろ経るほどに、女、親なく、頼りなくなるまに、「もろともにいふかひなくてあらむやは。」とて、河内の國、高安の郡に、行き通ふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしと思へるけしきもなく、いだしやりければ、男、「こと心ありてかかるにやあらむ。」と思ひうたがひて、前裁の中に隠れるて、河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとよう化粧して、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪龍田山

夜半にや君がひとり越ゆらむ

とよみけるを聞きて、かぎりなく『かなし。』と思ひて、河内へも行かずなりにけり。まれまれの高安に来て見れば、はじめこそ心にくくもつくりけれ、今はうちとけて、手づから飯匙取りて、筒子のうつはものに盛りけるを見て、心憂がりて行かずなりにけり。

さりければ、かの女、大和の方を見やりて、

君があたり見つつをらむ生駒山

雲な隠しそ雨は降るとも

と言ひて見いだすに、からうじて、大和人、「來む。」と言へり。よろこびて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君來むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば

頼まぬものの戀ひつつぞ経る

と言ひけれど、男、住まずなりにけり。

*

「名だかい古墳群」大きなものでは大阪府八尾市大竹にある心合寺山古墳があるが、高安山の麓（高安地区の中部である千塚・山畑・大窪・服部川・郡川附近）には中小約二百基の古墳群があり、現在は高安古墳群と呼ばれている。

「こなひだ秋篠の里からゆふがた眺めたその山の姿に……」[十月十四日の条](#)の「夕方、西の京にて」の断章の冒頭に、「秋篠の村はづれからは、生駒山が丁度いい工合に眺められた」とある。

「小説家のA君」個人サイト「タツノオトシゴ」の「年譜」の翌二十一日の記載から、これは阿部知二のことであることが分かる。当時満三十七歳で、辰雄と同年である。当時は明治大学教授として英文学を講じており、この年（昭和一六（一九四一）年）に訳したメルヴィルの「白鯨」は彼の翻訳の代表作となった（河出書房「新世界文学全集第一巻」所収。但し、これは「第一部」で続編完訳は戦後の昭和二四（一九四九）年を待たねばならなかった）。なお、以下の「奈良在住の畫家」「若き哲學者」は不詳。ただ、同年譜によれば、この日の夕方には大阪に出て、天麩羅を食べたとあるから、どうも事実には手が加えられているようである。」

十月二十一日夕

けふはA君と若き哲學者のO君とに誘はれるがままに、僕も朝から仕事を打棄つて、一しよに博物館や東大寺をみてまはつた。

午後からはO君の知つてゐる僧侶の案内で、ときをり僕が仕事のことなど考へながら歩いた、あの小さな林の奥にある戒壇院の中にもはじめてはひることができた。

がらんとした堂のなかは思つたより眞つ暗である。案内の僧があけ放してくれた四方の扉からも僅かしか光がさしこんでこない。壇上の四隅に立ちはだかつた四天王の像は、それぞれ一すぢの逆光線をうけながら、いよいよ神々しさを加へてゐるやうだ。

僕は一人きりいつまでも廣目天の像のまえを立ち去らずに、そのまゆねをよせて何物かを凝視してゐる貌を見上げてゐた。なにしろ、いい貌だ、濫かであつて烈しい。……

「さうだ、これはきつと誰か天平時代の一流人物の貌をそっくりそのまま模してあるにちがひない。さうでなくては、こんなに人格的に出來あがるはずはない。……」さうおもひながら、こんな立派な貌に似つかはしい天平びとは誰だらうかなあと想像してみたりしてゐた。

さうやつて僕がいつまでもそれから目を放さずとみると、北方の多聞天の像を先刻から見てゐたA君がこちらに近づいてきて、一しよにそれを見だしたので、

「古代の彫刻で、これくらゐ、かう血の温かみのあるのは少いやうな氣がするね。」と僕は低い聲で言つた。

A君もA君で、何か感動したやうにそれに見入つてゐた。が、そのうち突然ひとりごとのやうに言つた。「この天邪鬼といふのかな、こいつもかうやつて千年も踏みつけられてきたのかとおもふと、ちよつと同情するなあ。」

僕はさう言われて、はじめてその足の下に踏みつけられて苦しさに悶えてゐる天邪鬼に氣がつき、A君らしいヒュウマニズムに頬笑みながら、そのはうへもしばらく目を落した。……

數分後、戒壇院の重い扉が音を立てながら、僕たちの背後に鎖された。再びあの眞つ暗な堂のなかは四天王の像だけになり、其處には千年前の夢が急にいきいきと蘇り出し

てみさうなのに、僕は何んだか身の繋るやうな気がした。

それから僕たちは僧侶の案内で、東大寺の裏へ抜け道をし、正倉院がその奥にあるといふ、もの寂びた森のそばを過ぎて、畑などもある、人けのない裏町のはうへ歩いていった。

と、突然、僕たちの行く手には、一匹の鹿が畑の中から犬に追ひ出されながらも凄く速さで逃げていった。そんな小さな葛藤までが、なにか皮肉な現代史の一場面のように、僕たちの目に映った。

「やぶちゃん注・昭和一六（一九四一）年十月二十一日火曜日。なお、四天王の画像を示すためにしばやん氏の個人ブログ「しばやんの日々」の『東大寺戒壇院と、天平美術の最高傑作である国宝「四天王立像」』をリンクさせて戴く。

「A君と若き哲學者のO君」阿部知二とその連れ。前条参照。

「戒壇院」既注であるが、思うところあって再掲する。東大寺戒壇堂。天平勝宝六（七五四）年に聖武上皇が光明皇太后らとともに唐から渡来した鑑真和上から戒を授かったが、翌年、日本初の正式な授戒の場としてここに戒壇院を建立した。当時は戒壇堂・講堂・僧坊・廻廊などを備えていたが、江戸時代までに三度火災で焼失、戒壇堂と千手堂だけが復興されている（以上は東大寺公式サイトに拠る）。現在の建物は享保一八（一七三三）年の再建で、内部には中央に法華経見宝塔品の所説に基づく宝塔が安置され、その周囲を塑造四天王立像（国宝）が守る。ウイキの「東大寺」によれば、この四天王像は『法華堂の日光・月光菩薩像および執金剛神像とともに、奈良時代の塑像の最高傑作の一つ。怒りの表情をあらわにした持国天、増長天像と、眉をひそめ怒りを内に秘めた広目天、多聞天像の対照が見事である。記録によれば、創建当初の戒壇院四天王像は銅造であり、現在の四天王像は後世に他の堂から移したものである』とある。私は教え子に連れられて初めてここに行き、その教え子の好きだという、まさにこの広目天像に親しく接し、痛く魅入られたことが忘れられない。

「四天王」仏教の世界観の一つを担う四鬼神。世界の中心にある須弥山しゆみせんの中腹、東西南北の四方に住むとされ、東に持国天、南に増長天、西に広目天、北に多聞天（毘沙門天）がそれぞれ配される。古代インドの神話的な神であったが、仏教に取入れられて仏法の守護神とされた（「ブリタニカ国際大百科事典」に拠る）。

「廣目天」「毘留博叉」「毘流波叉」とも音写され、「雑語」「醜眼」「悪眼」とも訳される。須弥山中腹の西方にある周羅城に住し、西大洲（中央の閻浮提えんぶだいの西にある大陸。西牛貨洲）を守護するところから「西方天」とも呼ばれる。悪人を罰し、仏心を起させるとされ、像容は戒壇院のそのように、甲冑を著けて、左手に絵巻、右手に筆を持ち、足下に邪鬼を踏みつけている姿で表わされることが多い（「ブリタニカ国際大百科事典」に拠る）。

「多聞天」音写が毘沙門。名は、北方を守る仏法守護の神将で、常に如来の道場を守つ

て法を聞くことが最も多いことに由来する。甲冑を着けて、両足に悪鬼を踏まえ、手に宝塔と宝珠又は鉾（戒壇院のそれは右手で宝塔を掲げ、右手に短い鉾を持つ）を持った姿で表される。日本では福德の神とされる。因みに、東方を守護する持国天像は、左手に刀を持ち、足下に鬼を踏むのが通例（戒壇院のそれは右手で柄を持ち、左手で剣先の少し手前を押さえている）で、インド神話では東方の守護神はインドラであるが、仏教のそれとは全く異なる。古くからインドの護世神であった南方を守護する增長天の戒壇院のそれは、右手に長槍を立て、左手を腰に添えてやはり足下に鬼を踏んでいる（以上は総て「ブリタニカ国際大百科事典」に拠る）。

「天邪鬼」「あまんじゃく」とも呼称する。悪鬼神の小鬼、また、日本の妖怪の一種ともされ、「河伯」「海若」とも書く。参照したウィキの「天邪鬼」によれば、「仏教では人間の煩惱を表す象徴として、四天王や執金剛神に踏みつけられている悪鬼、また四天王の一人である毘沙門天像の鎧の腹部にある鬼面とも称されるが、これは鬼面の鬼が中国の河伯（かはく）という水鬼に由来するものであり、同じく中国の水鬼である海若（かいじやく）が「あまのじゃく」と訓読されるので、日本古来の天邪鬼と習合され、足下の鬼類をも指して言うようになった。『日本古来の天邪鬼は、記紀にある天稚彦（アメノワカヒコ）や天探女（アメノサグメ）に由来する。天稚彦は葦原中国を平定するために天照大神によって遣わされたが、務めを忘れて大国主神の娘を妻として8年も経って戻らなかった。そこで次に雉名鳴女を使者として天稚彦の下へ遣わすが、天稚彦は仕えていた天探女から告げられて雉名鳴女を矢で射殺する。しかし、その矢が天から射返され、天稚彦自身も死んでしまう。』天探女はその名が表すように、天の動きや未来、人の心などを探ることができるシャーマン的な存在とされており、この説話が後に、人の心を読み取って反対に悪戯をしかける小鬼へと変化していった。本来、天探女は悪者ではなかったが天稚彦に告げ口をしたということから、天の邪魔をする鬼、つまり天邪鬼となったと言われる。また、「天稚彦」は「天若彦」や「天若日子」とも書かれるため、仏教また中国由来の「海若」と習合されるようになったものと考えられている」とある。「そんな小さな葛藤までが、なにか皮肉な現代史の一場面のやうに、僕たちの目に映った」私には辰雄の当時の時勢への精一杯の皮肉であるように読める。」

十月二十三日、法隆寺に向ふ車窓で

きのふは朝から一しよう懸命になつて、新規に小説の構想を立ててみたが、どうしても駄目だ。けふは一つ、すべての局面轉換のため、最後のとつておきにしてゐた法隆寺へ往つて、こなひだホテルで一しよに話した畫家のSさんに壁畫の模寫をしてゐるところでも見せてもらつて、大いに自分を發奮させ、それから夢殿の門のまへにある、あの虚子の「斑鳩物語」に出てくる、古い、なつかしい宿屋に上がつて、そこで半日ほど小説を考へてくるつもりだ。

「やぶちゃん注」 「畫家のSさん」不詳。識者の御教授を乞う。個人サイト「タツノオトシゴ」の「[年譜](#)」によれば、直前の条である二日前の昭和一六（一九四一）年十月二十一日に『阿部知二とその連れとともに三月堂や戒壇院を見て回る』とあった後に続けて『法隆寺の壁画を模写している絵描きさんやお寺の坊さんと知り合いになる』とある人物ではある。

『夢殿の門のまへにある、あの虚子の「斑鳩物語」に出てくる、古い、なつかしい宿屋』
『虚子の「斑鳩物語』』というのは明治四〇（一九〇七）年に『ホトトギス』に掲載された高浜虚子の小説で、翌明治四十一年一月に出版された虚子初の短編小説集「鶏頭」に所収された。私は実は俳人としての虚子を生理的に激しく嫌悪している男である。しかし、少なくとも彼のこの写生文を意識した小説「斑鳩物語」は、しかしその映像性と浪漫性から――悔しいことに――大いに惹かれてしまう小品なのである。以下、簡単に梗概を記す。本文引用は[国立国会図書館デジタルコレクションの「斑鳩物語」の画像](#)（昭和二三（一九四八）年養徳社刊）を視認した。踊り字「く」は正字化した（新字体の全文は青空文庫の[ここで読める](#)）。筆者然とした作家と思しい主人公「余」が斑鳩の里を訪れ、法隆寺の夢殿の南門前にある両三軒の内の一つ、大黒屋という旅籠に泊り、『色の白い、田舎娘にしては才はじけた顔立ち』の『十七八の娘である』『お道』という仲居らしい少女に好感を抱く。また、ここに出る旅宿大黒屋は、『[東京紅團](#)』の「堀辰雄の奈良を歩く」の「法隆寺の鐘と大黒屋を歩く」によれば既に現存しない。当該頁では主人公「余」が持たれた欄干と思われるものが見える「旧大黒屋」の写真が見られる。辰雄はこの「斑鳩物語」のイメージを抱いて大黒屋を実際に訪れたのであった（次章参照）。以下、まず、「斑鳩物語」冒頭を引く。

《引用開始》

法隆寺の夢殿の南門の前に宿屋が三軒ほど固まつてある。其の中の一軒の大黒屋といふうちに車屋は梶棒を下ろした。急がしげに奥から走つて出たのは十七八の娘である。色の白い、田舎娘にしては才はじけた顔立ちだ。手ばしこく車夫から余の荷物を受取つて先に立つ。廊下を行つては三段程の段階子を登り又廊下を行つては三段程の段階子を登り一番奥まつた中二階に余を導く。小作りな體に重さうに荷物をさげた後ろ姿が余の心を牽く。

荷物を床脇に置いて南の障子を廣々と開けてくれる。大和一圓が一目に見渡されるやうないゝ眺望だ。余は其まゝ障子に凭もたれて眺める。

此の座敷のすぐ下から菜の花が咲き續いて居る。さうして菜の花許りでは無く其に點接して梨子の棚がある。其梨子も今は花盛りだ。黄色い菜の花が織物の地で、白い梨子の花は高く浮織りになつてゐるやうだ。殊に梨子の花は密生してゐない。其荒い隙間から菜の花の透いて見えるのが際立つて美しい。其に處々麥畑も點在して居る。偶々燈心草を作つた水田もある。梨子の花は其等に頓着なく浮織りになつて遠く彼方に續いて居

る。半里も離れた所にレールの少し高い土手が見える。其土手の向うもこゝと同じ織物が織られてゐる様だ。法隆寺はなつかしい御寺である。法隆寺の宿はなつかしい宿である。併し其宿の眺望がこんな善からうとは想像しなかつた。これは意外の獲物である。娘は春日塗の大きな盆の上で九谷まがひの茶碗に茶をついで居る。やゝ斜に俯向いてゐる横顔が淋しい。さきに玄關に急がしく余の荷物を受取つた時のいきいきした娘とは思へぬ。赤い襦袢の襟もよごれて居る。木綿の著物も古びて居る。それが其淋しい横顔を一層力なく見せる。

併しこれは永い間では無かつた。茶を注いでしまつて茶托ちやたくに乗せて余の前に差し出す時、彼はもう前のいきいきした娘に戻つて居る。

「旦那はん東京だつか。さうだつか。ゆふべ奈良へお泊りやしたの。本間ほんまにア、よろしい時候になりましたなア」

と脱ぎ棄てた余の羽織を畳みながら、

「御參詣だつか、おしらべだつか。あゝさうだつか。二三日前にもなア國學院とかいふところの方が來やはりました」

と羽織を四つにたゝんだ上に紐を載せて亂箱の中に入れる。

余は渴いた喉に心地よく茶を飲み干す。東京を出て以來京都、奈良とへめぐつて是程心の落つくのを覺えた事は今迄無かつた。余は膝を抱いて再び景色を見る。すぐ下の燈心草の作つてある水田で一人の百姓が泥を取つては箕みに入れて居る。箕に土が満ちると其を運んで何處かへ持つて行く。程なく又來ては箕に土をつめる。何をするのかわからぬが此廣々とした景色の中で人の動いて居るのは只此百姓一人きりほか目に入らぬ。

娘は縁に出て手すりの外に兩手を突き出して余の足袋の埃りを拂つて又之を亂箱の中に入れる。

「いゝ景色だナア」

といふと直ぐ引取つて、

「此邊はなア菜種となア梨子とを澤山に作りまつせ。へー燈心も澤山に作ります。燈心はナア、あれを一遍よう乾かして、其から叩いてナア、それから又水に漬けて、其から長い錐きりのやうなもので突いて出しやはります。其から又疊かさねの表にもしやはります。長いのから燈心を取りやはつて短かいのは大概疊かさねの表にしやはります」

「疊かさねの表には藺いんをするのぢやないか。燈心草も疊かさねの表になるのかい」

「いやな旦那はん。燈心草といふのが藺いんの事ことつたすがな」

と笑ふ。余は電報用紙を革袋の中から取り出す。娘は棚の上の硯箱を下ろして蓋を取る。

「まア」

といつて再び硯箱を取り上げてフツと軽く硯の上の埃りを吹いて藥罐やくわんの湯を差して墨を磨つて呉れる。墨はゴシゴシと厭いややな音がする。

電報を認め終つて娘に渡しながら、

「下は大變多勢のお客だね。宴會かい」

と聞く。娘は電報を二つに疊んで膝の上に置いて、

「いゝえ。皆東京のお方です。大師講のお方で高野山に詣りやはつた歸りだすさうな。今日はこゝに泊りやはつてあした初瀬はせに行きやはるさうです。今晚はおやかましようおますやろ」

と娘は立たうとする。電報は一刻を急ぐ程の用事でもない。

「初瀬は遠いかい」

とわざと娘を引とめて見る。

「初瀬だつか」

と娘も一度腰を下ろして、

「初瀬はナ、そらあのお山ナ、そら左りの方の山の外れに木の茂つたところがありますやろ……」

と延び上るやうにして、

「あこが三輪のお山で、初瀬はあのお山の向うわきになつてます。旦那はんまだ初瀬に行きやはつた事おまへんか」

「いやちつとも知らないのだ。さうかあれが三輪か。道理で大變に樹が茂つてゐるね。それから吉野は」

「吉野だつか」

と娘は電報を疊の上に置いて膝を立てる。手摺りの處に梢を出してゐる八重櫻が娘の目を遮ぎるのである。余は立上つて縁に出る。娘も余に寄り添うて手摺りに凭れる。

「そら、此向うに高い山がおますやろ、霞のかゝつてる。へーあの藪の向うだす。あれがナ、多武の峰で、あの多武の峰の向うが吉野だす」

娘は櫻の梢に白い手を突き出して、

「あの高い山は知つとあやすやろ……」

「あれか、あれが金剛山ぢやないか。あれは奈良からも見えてゐたから知つてる」

娘は手摺り傳ひに左りへ左へと寄つて行つて、

「旦那はん、一寸來てお見やす。そらあそこに百姓家がおますやろ。さうだす、今鴉の飛んでる下のところ。さうだす、あの百姓家の左の方にこんもりした松林がおますやろ。そやおまへんがナ。それは鐵道のすぐ向うだすやろ。それよりもつとずつと向うに、さうだすあの多武の峰の下の方にうつすらした松林がありますやろ。さうさう。あこだす、あこが神武天皇様の畝火山だす」

娘の顔はますますいきいきとして來る。畝火山を教へ終つた彼はまだ何物をか探して居る。彼の知つて居る名所は見える限り教へてくれる氣と見える。

「お前大變よく知つて居るのね。どうしてそんなによく知つて居るの。皆な行つて見たのかい」

「へー、皆んな行きました」

といつて余を見た彼の眼は異様に燃えてゐる。

「さう、誰と行つたの、お父サンと」

「いゝえ」

「お客さんと」

「いゝえ。そんな事聞きやはらいでもよろしまんがナア」

と娘は軽く笑つて、

「私の行きました時も丁度菜種の盛りでなア。さうさうやつぱり四月の中頃やつた」
と夢見る如き眼で一寸余の顔を見て、

「旦那はん、あんたはんお出でやすのなら連れていておくれやすいな、ホ、ホ、私見たいなものはいやだすやろ」

「いやでも無いが、こはいナ」

「なぜだす」

「なぜでも」

「なぜだす」

「こはいぢやないか」

「しんきくさ。なぜだすいな、いひなはらんかいな」

「いゝ人にでも見つからうもんなら大變ぢやないか」

「あんたの」

「お前のサ」

「ホ、ホ、馬鹿におしやす。そんなものがあるやうならナ。……無い事もおへんけどナ。……ホ、ホ、御免やすえ。……ア、電報を忘れてゐた。お風呂が沸いたらすぐ知らせまつせ」

と妙な足つきをして小走りに走つて畳の上の電報を抄すくふやうに拾ひ上げて座敷を出たかと思ふと、襖を締める時、

「ほんまにおやかましよう。御免やすえ」

としづかに挨拶してニツコリ笑つた。

「お道はん、お道はん」

と下で呼ぶ聲がする。

「へーい」

といふ返辭も落ついて聞こえた。

お道サンが行つたあとは俄に淋しくなつた。きのふ奈良でしらべた報告書の残りを認める。時々下の間で多勢の客の笑ふ聲に交つてお道サンの聲も聞えるが、座敷が別棟になつてゐるのではつきりわからぬ。

夢殿の鐘が鳴る。時計を見るともう六時だ。

《引用終了》

その後、風呂が沸いたと告げにきた女将おかみから、彼女は「此うちの娘でなくすぐ此裏の家
の娘で、平常は自分のうちで機械機を織つて居るが、世話しい時は手傳ひに来る」娘と

知る（ここまでが「上」）。

翌日、「余」は法起寺の三重の塔を仰ぎ見て、それに無性に登りたくなり、寺の小僧に乞うて一緒に昇り出したものの、予想を超える難所で、ほうほうの体でやっと三層目の欄干へと辿りつく。『回廊傳ひに東の方に廻つて見る。宿屋の二階で見た菜の花畑はすぐ此塔の下までも續いて居る。梨子の棚もとびとびにある。麗かな春の日が一面に其上に當つて居る。今我等の登つてゐる塔の影は塔に近い一反ばかりの菜の花の上に落ちて居る』。

《引用開始》

「又來くさつたな。又二人で泣いてるな」

と小僧サンは獨り言をいふ。見ると其塔の影の中に一人の僧と一人の娘とが倚り添ふやうにして立話しをして居る。女は僧の肩に凭れて泣いて居る。二人の半身は菜の花にかくれて居る。

「あの坊さん君知つてるのですか」

「あれなあ、私の兄弟子の了然れうねんや。學問も出来るし、和尚サンにもよく仕へるし、おとなしい男やけれど、思ひきりがわるい男でナ。あのお道といふ女の方がよつぽど男まさりだつせ。あのお道はナア、親にも孝行で、機もよう織つて、氣立もしつかりした女でナア、何でも了然が岡寺に居つた時分にナア、下市とか上市とかで茶屋酒を飲んだ事のある時分惚れ合つてナア、それから了然はこちらに移る、お道はうちへ歸るししてナア、今でもあんなこととして泣いたり笑つたりしてますのや。ハ、、、」

と小僧サンは無頓着に笑ふ。お道は今朝から宿に居なかつたが今こゝでお道を見やうとは意外であつた。殊に其情夫が坊主であらうとは意外であつた。我等は塔の上からだまつて見下ろして居る。

何か二人は話してゐるらしいが言葉はすこしも聞えぬ。二人は塔の上に人があつて見下ろして居やうとは氣がつくわけも無く、了然はお道をひきよせるやうにして坊主頭を動かして話して居る。菜の花を摘み取つて髪に挿みながら聞いてゐたお道は急に頭を振つて包みに顔をおしあてて泣く。

「了然は馬鹿やナア。あの阿呆面見んかいナ。お道はいつやら途中で私に遇ひましてナ、こんなこというてました。了然はんがえらい坊ぼんさんにならはるのには自分が退のくのが一番やといふ事は知てるけど、こちらからは思ひ切ることには出來ん。了然はんの方から棄てなはるのは勝手や。こちらは焦がれ死に死ぬまでも片思ひに思うて思ひ抜いて見せる。と斯んなこというてました。私はお道好きや。私が了然やつたら坊主やめてしてもお道の亭主になつてやるのに。了然は思ひきりのわるい男や。ハ、、、」

と小僧サンは重たい口で洒落たことをいふ。塔の影が見るうちに移る。お道はいつの間にか塔の影の外に在つて菜の花の蒸すやうな中に春の日を正面まへに受けて居る。涙にぬれて居る顔が菜種の花の露よりも光つて美しい。我等が塔を下りようと彼の大佛の穴ぐぐりを再びもとへぐぐり始めた時分には了然も纔に半身に塔の影を止めて、半身には

お道の浴びて居る春光を同じく共に浴びてゐた。了然といふ坊主も美しい坊主であつた。

《引用終了》

ここまでが「中」である。而して、その晩のこと、戻つた大黒屋で晚酌に酒を数杯飲んで机に凭れてとろとろとし、

《引用開始》

ふと目がさめて見るとうすら寒い。時計を見ると八時過ぎだ。二時間程もうたゝ寝をしたらしい。昨日に引きかへ今日は広い宿ががらんとして居る。客は余一人ぎりに見える。静な夜だ。耳を澄ますと二處程で箴をきの音がして居る。

一つの方はカタンカタンと冴えた箴をきの音がする。一つの方はポットンポットンと沈んだ音がする。其二つの音がひつそりした淋しい夜を一層引き締めて物淋しく感ぜしめる。初め其箴をきの音は遠いやうに思つたがよく聞くと餘り遠くでは無い。余は夢の名残りを急須の冷い茶で醒ましてぢつと其二つの音に耳をすます。

蛙の聲もする。はじめ氣がついた時は僅に蛙の聲かと聞き分くる位のひそみ音であつたが、箴をきの音と張り競ふのか、あまたのひそみ音の中に一匹大きな蛙の聲がぐわアとする。あれが蛙の聲かなと不審さるゝ程の大きな聲だ。晝間も燈心草の田で啼いてゐたがあんな大きな聲のはゐなかつた。夜になつて特に高く聞えるのかも知れぬ。一匹其大きなのが啼き出すと又一つ他で大きなのが啼く。又一つ啼く。しまひには七八匹の大きな聲がぐわアぐわアと折角の夜の寂寥を攪きみ亂すやうに鳴く。其でも蛙の聲だ。はじめひそみ音の中に突如として起こつた大きな聲を聞いた時は噪がしいやうにも覺えたが、其が少し引き續いて耳に慣れると矢張り淋しいひそみ音ねの方は一層淋しい。氣の勢せいか箴をきの音もどうやら此蛙の聲と競ひ氣味に高まつて来る。カタンカタンといふ音は一層明瞭に冴えて来る。ポットンポットンといふ音は一層重々しく沈んで来る。

お神サンが床を延べに來る。

「旦那はん毛布けつとなんかおかぶりやして、寒むおまつか」

「少しうたゝねをしたので寒い。それに今晚は馬鹿に靜かだねえ。お道さんは來ないのかい」

「今晚は來やはりまへん。そら今箴をきの音がしてますやろ、あれがお道はんだすがな」

「さうかあれがお道さんか」

と余は又箴をきの音に耳を澄ます。前の通り冴えた音と沈んだ音とが聞こえる。

「二處でしてゐるね。其に音が違ふぢやないか。お道さんの方はどちらだい」

「そらあの音の高い冴え冴えした方な、あれがお道さんのだす」

「どうしてあんなに違ふの。機をりが違ふの」

「機をりは同じ事こつたすけれど、箴をきが違ひます。音のよろしいのを好く人は箴をきを別段に吟味ぎんみしますのや」

余は再び耳を澄ます。今度は冴えた音の方にのみ耳を澄ます。カタンカタンと引き續いた音が時々チヨツと切れる事がある。糸でも切れたのを繋ぐのか、物思ふ手が一寸と

まるのか。お神サンは敷布團を二枚重ねて其上に上敷きを延べながら、

「戦争の時はナア、一機ひとはたの織り賃を七十銭もとりやはりましてナア、へえ繻帯にするのやさかい薄い程がよろしまんのや。其に早く織るものには御褒美を呉りやはつた。其時は機もよろしうおましたけど、もう此頃はあきまへん。へーへあんたはん一機二十五銭でナア、一機といふのは十反かゝつてるので、なんぼ早うても二日はかゝります」
お神サンは聞かぬ事まで一人で喋舌しゃべる。突然箴しやの音に交つて唄が聞こえる。

『苦勞しとげた苦しい息が火吹竹から洩れて出る』

「お道さんかい」

と聞くと、

「さうだす。えゝ聲だすやろ」

とお神サンがいふ。余は聲のよしあしよりもお道サンが其唄をうたふ時の心持を思ひやる。

「あれでナア、箴の音もよろしいし唄が上手やとナア、よつぼど草臥れが違ひますといな」

「あんな唄をうたふのを見るとお道サンもなかなか苦勞してゐるね」

「ありや旦那はん此邊はやりうたの流行唄ですがナ、織子といふものはナア、男でも通るのを見るとすぐ悪口の唄をうたうたりナア、そやないと惚れたとかはれたとかいふ唄ばかりだす」

俄に男女の聲が聞こえる。

「どこへ行きなはる」

「高野へお参り」

「ハ、ア高野へ御参詣か。夜さり行きかけたらほんまにくせや」

「お父つはんはもう寝なはつたか」

「へー休みました」

高野へ参詣とは何の事かと聞いて見たら、

「はゞかりへ行くことをナア、此邊ではおどけてあないにいひまんのや」

とお神サンは笑つた。よく聞くと女の聲はお道サンの聲であつた。男の聲は誰ともわからぬ。長屋つゞきの誰かであるらしい。

箴の音が一層高まつて又唄が聞こえる。唄も調子もうきうきとして居る。

『鴉啼迄寝た枕元櫛の三日月落ちて居る』

お神サンは床を延べてしまつて、机のあたりを片づけて、火鉢の灰をならして、もうラムプの火さへ小さくすればよいだけにして、

「お休みやす。あまりお道サンの唄に聞きほれて風邪引かぬやうにおしなはれ」と引下る。

酒も醒めて目が冴える。箴の音を見棄て、此儘寝てしまふのも惜しいやうな氣がする。晝間書きさして置いた報告書の稿をつぐ。ふと氣がつくといつの間にやら筆をとめて、

きのふのお道サンの喋舌つた事や、今日塔から見下ろした時の事やを回想しつゝ箴の音に耳を澄まして居る。又唄が聞こえる。

『大分世帯に染しゆんでるらしい目立つ鹿の子の油垢』

調子は例によつてうきうきとして居るが、夜が更けた故せむかどこやら身に沁むやうに覺える。これではならぬと更に稿をつぐ。

終に暫くの間は箴の音も耳に入らぬやうになつて稿を終つた。今日で取調の件も終り、今夜で報告書も書き終つた。がつかりと俄に草臥ねまきれた様に覺える。

火を小さくして寢衣ねまきになつて布團の中に足を踏み延ばす。箴の音はまだ聞こえて居る。忘れてゐたが沈んだ方のもまだ聞えて居る。

眠るのが惜しいやうな氣がしつゝとうとうとする。ふと下で鳴る十二時の時計の音が耳に入ったとき氣をつけて聞いて見たら、沈んだ方のはもう止んでゐたが、お道サンの箴の音はまだ冴え冴えと響いてゐた。

《引用終了》

なお、続けて、私は明治四一（一九〇八）年に出版された虚子初の短編小説集「鶏頭」に所収された初出に最も近いものを底本にした私の電子化した「斑鳩物語」があるので、余裕のある方は、そちらを読みたい。俳人虚子は大嫌いだが、この小説は、妙に心に残る。そも……この「お道さん」に逢つて見たかつた氣がするのは……恐らく……私だけではあるまい……」

十月二十四日、夕方

きのふ、あれから法隆寺へいつて、一時間ばかり壁畫を模寫してゐる畫家たちの仕事を見せて貰ひながら過ごした。これまでにも何度かこの壁畫を見にきたが、いつも金堂のなかが暗い上に、もう何處もかも痛めたしいほど剝落してゐるので、殆ど何も分からず、ただ「かべのゑのほとけのくにもあれにけるかも」などといふ歌がおのづから口ずさまれてくるばかりだつた。――それがこんど、金堂の中にはひつてみると、それぞれ足場の上で仕事をしてゐる十人ばかりの畫家たちの背ごしに、四方の壁に四佛淨土を描いた壁畫の隅々までが螢光燈のあかるい光のなかに鮮やかに浮かび上がつてゐる。それが一層そのひどい剝落のあとをまざまざと見せてはゐるが、そこに浮かび出てきた色調の美しいといつたらない。畫面全體にほのかに漂つてゐる透明な空色が、どの佛たちのまはりにも、なんともいへず愉しげな雰圍氣をかもし出してゐる。さうしてその佛たちのお貌かほだの、寶冠だの、天衣だのは、まだところどころの陰などに、目のさめるほど鮮やかな紅だの、緑だの、黄だの、紫だのを残してゐる。西域あたりの畫風らしい天衣などの縁いろの凹凸のぐあひも言ひしれず美しい。東の隅の小壁に描かれた菩薩の、手にしてゐる蓮華に見入つてゐると、それがなんだか薔薇の花かなんどのやうな、幻覺さへおこつて來さうになるほどだ。

僕は模寫の仕事の邪魔をしないやうに、できるだけ小さくなつて四壁の繪を一つ一つ見てまはつてゐたが、とうとうしまひに僕もSさんの櫓の上にあがりこんで、いま描いてゐる部分をちかちかと見せて貰つた。そこなどは色もすつかり剥げてゐる上、大きな龜裂が稻妻形にできてゐる部分で、さういふところもそつくりその儘に模寫してゐるのだ。なにしろ、こんな狭苦しい櫓の上で、繪道具のいつぱい散らばつた中に、身じろぎもならず坐つたざり、一日ちゆう仕事をして、一寸平方位の模寫しかできないさうだ。どうかすると何んにもない傷痕ばかりを描いてゐるうちに一と月ぐらゐはいつのまにか立つてしまふこともあるといふ。——そんな話を僕にしながら、その間も絶えずSさんは繪筆を動かしてゐる。僕はSさんの仕事の邪魔をするのを怖れ、お禮をいつて、ひとりで櫓を下りてゆきながら、いまにも此の世から消えてゆかうとしてゐる古代の痕をかうやつて必死になつてその儘に残さうとしてゐる人たちの仕事に切ないほどの感動をおぼえた。……

それから金堂を出て、新しくできた寶藏の方へゆく途中、子規の茶屋の前で、僕はおもひがけず詩人のH君にひよつくりと出逢つた。ずつと新薬師寺に泊つてゐたが、あす歸京するのださうだ。さうして僕がホテルにゐるといふことをきいて、その朝訪ねてくれたが、もう出かけたあとだつたので、こちらに僕も來てゐるとは知らずに、ひとりで法隆寺へやつて來た由。——そこで子規の茶屋に立ちより、柿など食べながらしばらく話しあひ、それから一しよに寶藏を見にゆくことにした。

僕の一番好きな百濟觀音は、中央の、小ぢんまりとした明かるい一室に、ただ一體だけ安置せられてゐる。こんどはひどく優遇されたものである。が、そんなことにも無關心さうに、この美しい像は相變らずあどけなく頬笑まれながら、靜かにお立ちになつてゐられる。……

しかしながら、此のうら若い少女の細つそりとしたすがたをなすつてゐられる菩薩像は、おもへば、ずいぶん數奇なる運命をもたれたもうたものだ。——「百濟觀音」といふお名稱も、いつ、誰がとなへだしたもののやら。が、その示すごとく古朝鮮などから將來せられたといふ傳説もそのまま素直に信じたいほど、すべてが遠くからきたものの異常さで、そのうつとりと下脹しもぶくれた頬のあたりや、胸のまへで何をさうして持つてゐたのだから忘れてしまつてゐるやうな手つきの神々しいほどのうつつなさ。もう一方の手の先きで、ちよいと軽くつまんでゐるきりの水瓶などはいまにも取り落しはすまいかとおもはれる。

この像はさういふ異國のものであるといふばかりではない。この寺にかうして漸つと落ちつくやうになつたのは中古の頃で、それまでは末寺の橘寺あたりにあつたのが、その寺が荒廢した後、此處に移されてきたのだらうといはれてゐる。その前はどこにあつたのか、それはだれにも分からないらしい。ともかくも、流離といふものを彼女たちの哀しい運命としなければならなかつた、古代の氣だかくも美しい女たちのやうに、此の像も、その女身の美しさのゆゑに、國から國へ、寺から寺へとさすらはれたかと想像す

ると、この像のまだうら若い少女のやうな魅力もその底に一種の犯し難い品を帯びてくる。……そんな想像にふけりながら、僕はいつまでも一人でその像をためつすがめつして見てゐた。どうかすると、ときどき揺らいでゐる瓔珞やうらくのかげのせみか、その口もとの無心さうな頬笑みが、いま、そこに漂つたばかりかのやうに見えたりすることもある。さういふ工合なども僕にはなかなかありがたかつた。……

それから次ぎの室で伎樂面などを見ながら待つてゐてくれたH君に追ひついて、一しよに寶藏を出て、夢殿ゆめどののそばを通りすぎ、その南門のまへにある、大黒屋といふ、古い宿屋に往つて、晝食をとにした。

その宿の見はらしのいい中二階になつた部屋で、田舎らしい鳥料理など食べながら、新薬師寺での暮らしぶりなどをきいて、僕も少々うらやましくなつた。が、もうすこし人並みのからだにしてからでなくては、さういふ精進三味はつづけられさうもない。それからH君はこちらに滞在在中に、ちか頃になく詩がたくさん書けたといつて、いよいよ僕をうらやましがらせた。

四時ごろ、一足さきに歸るといふH君を郡山ごほりやま行きのバスのところまで見送り、それから僕は漸つとひとりになつた。が、もう小説を考へるやうな氣分にもなれず、日の暮れるまで、ぼんやりと斑鳩いかるがの里をぶらついてゐた。

しかし、夢殿の門のまへの、古い宿屋はなかなか哀れ深かつた。これが虚子の「斑鳩物語」に出てくる宿屋。なにしろ、それはもう三十何年かまへの話らしいが、いまでもそのときとおなじ構へのやうだ。もう半分家が傾いてしまつてゐて、中二階の廊下など歩くのもあぶない位になつてゐる。しかしその廊下に立つと、見はらしはいまでも悪くない。大和の平野が手にとるやうに見える。向うのこんもりした森が三輪山あたりらしい。菜の花がいちめんに咲いて、あちこちに立つてゐる梨の木も花ざかりといつた春さきなどは、さぞ綺麗だらう。と、何んといふことなしに、そんな春さきの頃の、一と昔まえのいかるがの里の若い娘のことを描いた物語の書き出しのところなどが、いい氣もちになつて思ひ出されてくる。——しかし、いまはもうこの里も、この宿屋も、こんなにすつかり荒れてしまつてゐる。夜になつたつて、箆をさを打つ音で旅びとの心を慰めてくれるやうな若い娘などひとりもゐまい。だが、きいてみると、ずつと一人きりでこの宿屋に泊り込んで、毎日、壁畫の模寫にかよつてゐる畫家があるさうだ。それをきいて、僕もちよつと心を動かされた。一週間ばかりこの宿屋で暮らして、僕も仕事をしてみたら、もうすこしぴんとした氣もちで仕事ができるかも知れない。

どのみち、けふは夢殿ゆめどのや中宮寺ちゆうぐうじなんでも見損つたから、またあすかあさつて、もう一遍出なほして来よう。そのときまでに決心がついたら、ホテルなんぞはもう引き拂つて來てもいい。……

そんな工合で、結局、なんにも構想をまとめずに、暗くなつてからホテルに歸つてくると、僕は、夜おそくまで机に向つて最後の努力を試みてみたが、それも空しかつた。さうして一時ちかくなつてから、半分泣き顔をしながら、寢床にはひつた。が、晝間あ

れだけ氣もちよげに歩いてくるせみか、よく眠れるので、愛想がつきる位だ。――

けさはすこし寢坊をして八時起床。しかし、お晝もけふはホテルでして、一日ぢゆう新らしいものに取りかかつてゐた。――こなひだ折口博士の論文のなかでもつて綺麗だなあとおもつた葛の葉といふ狐の話。あれをよんでから、もつといろんな狐の話をよみたくなつて、靈異記や今昔物語などを捜して買つてきてあつたが、けさ起きしなにその本を手にとつてみてゐるうちに、そんな狐の話ではないが、そのなかの或る物語がふいと僕の目にとまつた。

それは一人のふしあはせな女の物語。――自分を與へ與へしてゐるうちにいつしか自分を神にしてゐたやうなクロオデル好みの聖女とは反對に、自分を與へれば與へるほどいよいよはかない境涯に墮ちてゆかなければならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話。――さういふ物語の女を見いだすと、僕はなんだか急に身のしまるやうな氣もちになつた。これならば幸先きがよい。さういふ中世のなんでもない女を描くのならば、僕も無理に背のびをしなくともいいだらう。こんやもう一晚、この物語をとつくりと考へてみる。

ジャケット届ゐた。本當にいいものを送つてくれた。けさなどすこし寒かつたので、一枚ぐらいジャケットを用意してくればよかつたとおもつてゐたところだ。こんやから早速著てやらう。

「やぶちゃん注」：「子規の茶屋」子規の知られた「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」は「法隆寺の茶店に憩ひて」という前書を持つが、その茶店が聖靈院前の池の側にあつたもので、子規の句に因んで「柿茶屋」と呼称された。但し、この茶屋は大正三（一九一四）年秋に取り壊されているので（青龍氏のブログ「大和&伊勢志摩散歩」の「[法隆寺 子規の句碑（1）](#)」に拠る）、辰雄が入つたのはこの実際の「柿茶屋」ではないので注意。「誌人の日君」不詳。識者の御教授を乞う。

「百済観音」広隆寺蔵弥勒菩薩像とともに、飛鳥時代を代表する仏像とされる国宝「観世音菩薩立像」の俗称。基本は樟製一木造の著彩であるが、両腕の肘から先と水瓶・天衣などは別材を継いである。高さ二・〇九メートルの八頭身、扁平で細く直立の左右均整。光背は木造で、その文様は飛鳥時代のものに似ているものの、それを支える支柱は竹竿を模して造られており、これは極めて珍しいものである。宝冠は線彫の銅版製、三個の青いガラス玉で飾られてある。以下、「[法隆寺の国宝美術](#)」という頁から引用する。「独特の体軀の造形を有し、杏仁形（アーモンド形）の目や古式な微笑みをたたえる表情は神秘的であり、多数の随筆等によつて紹介されるなど、我が国の国宝を代表する仏像の一つです。』本来、百済観音は、虚空像菩薩として伝わっていました。虚空とは、宇宙を意味し虚空菩薩は宇宙を蔵にするほど富をもたらす仏様ということなのです。』その宇宙の姿を人の形に表したのが百済観音だというわけです。』もともと、この像は金堂の壇上で、釈迦三尊像の後ろに北向きに安置されていたもので、今は新築さ

れた百済観音堂に安置されていますが、この像の伝来は謎に包まれています。法隆寺の最も重要な古記録である『天平一九（七七七）年の『法隆寺資財帳』などにも記載がなく、いつ法隆寺に入ったのかわかっていません。元禄一一（一六九八）年の『諸堂仏躰数量記』の金堂の条に「虚空藏立像、七尺五分」と、初めてこの像についてと思われる記事があらわれ、江戸時代『延享三（一七四六）年に『良訓が記した「古今一陽集」に「虚空藏菩薩、御七尺餘、此ノ尊像ノ起因、古記ニモレタリ。古老ノ傳ニ異朝將來ノ像ト謂フ。其ノ所以ヲ知ラザル也」と記されているとあります』（原サイトの引用部の表記を正字正仮名に変更させて貰った）。『明治になって、それまで象と別に保存されていた、頭部につける金銅透彫で瑠璃色のガラス玉を飾った美しい宝冠が発見され、この宝冠に観音の標識である化仏があらわされていることから、虚空菩薩ではなく観音像であるとされるようになりました。いつしかこれに「百済国将来」という伝えがかぶせられて「百済観音」とよばれるようになったということです。しかし、作風からみて百済の仏像とはいえず、また朝鮮半島では仏像の用材に用いられていない楠の木でできていることから、日本で造られた像であると見られています』とある。[グーグル画像検索](#)

[「百済観音」](#)をリンクさせておく。……私はこの……遠い昔、[白血病で亡くなった伯母](#)のような百済観音が好きである……

「數奇」読みはママ。これは意味から言えば「すうき」の誤りでしょうか思われない。

「橋寺」聖徳太子建立七大寺（本寺の他は法隆寺（斑鳩寺）・広隆寺（蜂丘寺）・法起寺（池後寺）・四天王寺・中宮寺・葛木寺）の一つで聖徳太子生誕地ともされる奈良県高市郡明日香村にある天台宗の仏頭山上宮皇院菩提寺。本尊は聖徳太子如意輪観音。通称の橋寺は垂仁天皇の命により不老不死の果物を取りに行った田道間守が持ち帰った橋の実を植えたことに由来する。

「大黒屋」前の章の私の注を参照されたい。

「三十何年かまへの話」「斑鳩物語」が『ホトトギス』に発表されたのは明治四〇（一九〇七）年。昭和一九（一九四一）年であるから、発表時でも四十三年前。

「そんな春ささきの頃の、一と昔まえのいかるがの里の若い娘のことを描いた物語の書き出しのところ」[前条注](#)に引用済。以下の「夜になつたつて、箆を打つ音で旅びとの心を慰めてくれるやうな若い娘などひとりもあまい」などもそちらを参照されたい。

「こなひだ折口博士の論文のなかでもつて綺麗だなあとおもつた葛の葉といふ狐の話」[既注](#)。

「クロオデル」[既注](#)。

「自分を與へれば與へるほどいよいよはかない境涯に墮ちてゆかなければならなかつた一人の女の、世にもさみしい身の上話」当初、迂闊にも私はここに、「これは一体、「日本靈異記」或いは「今昔物語集」のどの話を指しているのか？ 識者の御教授を是非とも乞うものである」という注をつけていたのであるが、昔の教え子から、これは辰雄の小説「曠野」の元になった「今昔物語集」巻第三十の「中務大輔娘成近江郡司婢語第四」

ではないかと知らせて呉れた。如何にも私は愚鈍であった。辰雄がこの旅から帰って翌十一月に起筆から二日ほどで「曠野」を仕上げ、十二月の『改造』に発表している。原話の梗概は以下の通り。――中務大輔某の娘が父母に先立たれ家が傾き、貧しさから自ら夫兵衛佐が身を退くようにさせ、独り零落したままに淋しく暮らしていた娘が、同居する尼の良かれと思う仲立ちの言うに任せ、近江国の郡司の子の側室となり下国、しかし正妻の嫉妬から、夫の父郡司の下働きとなった。そのうち、新任の国司の目にとまって声を掛けられたが、実はその国司は分かれた先の夫で、琵琶湖の波音のする中、遂に娘を忘れ難かった先夫が、「これぞこのつひにあふみをいとひつつ世にはふれども生けるかひなし」と一首を詠んで、自らの正体を涙ながらに明かす。しかし、その言葉を聴くや、女は己れの宿命の哀しさと恥ずかしさのあまり、息絶えてしまう――これはまさにこの辰雄の言葉通りの話であった。【二〇二三年二月三日削除追記】「曠野」はこの公開の直後、[本ブログ・カテゴリ「堀辰雄」で全四回](#)で、[サイト](#)で [PDF](#) 縦書版（古いので孰れも正字は不全）で一括で公開し、[「今昔物語集」の原話も注付きで原文をこちらに](#)、[私のオリジナル現代語訳をこちらに公開してある](#)。」

十月二十四日夜

ゆふがた、あさぢ浅茅が原はらのあたりだの、ついぢのくずれから菜畑などの見えたりしてゐる高畑たかばたけの裏の小徑せみみちだのをさまよひながら、きのふから念頭を去らなくなつた物語の女のうへを考へつづけてゐた。かうして築土つちぢのくずれた小徑を、ときどき尾花おぼななどをかき分けるやうにして歩いてゐると、ふいと自分のまへに女を捜してゐる狩衣かりぎぬすがたの男が立ちあらはれさうな氣がしたり、さうかとおもふとまた、何處かから女のかなしげにすり泣く音がきこえて来るやうな氣がして、おもはずぞつとしたりした。これならば好い。僕はいつなん時でも、このまますうつとその物語の中にはひつてゆけさうな氣がする。……

この分なら、このままホテルにいて、ときどきここいらを散歩しながら、一週間ぐらゐで書いてしまへさうだ。

「やぶちゃん注…ここで辰雄の言う「物語」はもう明らかに、前に注した通り、十二月の『改造』に発表することとなる「曠野」である。既に述べた通り、実際にはこの旅から帰って翌十一月に起筆から二日ほどで仕上げている。

「浅茅が原」奈良公園内の春日参道の南側丘陵地一帯の古地名。現在、浅茅ヶ原園地。国立博物館の南側。

「高畑」奈良市高畑町。古くから続く春日大社の社家町で、春日原始林に連なる高円山を背に新薬師寺・白毫寺といった古刹が点在する。大正から昭和の初め頃に文化人の憧れの地とされていた地域で、志賀直哉や画家足立源一郎を初め、多くの文人や画家の自

宅が軒を連ねていた(以上は「歴史街道 文化遺産をめぐる旅へようこそ」の「奈良の文化に触れる―高畑く奈良町を歩く」に拠った)。」

十月二十五日夜

けさちよつと博物館にいっただけで、あとは殆ど部屋とヴェランダとで暮らしながら、小説の構想をまとめた。構想だけはすつかり出来た。いま細部の工夫などを愉しんでやつてゐる。日暮れごろ、また高畑のはうへ往つて、ついぢの崩れのあるあたりを歩いてきた。尾花が一めに咲きみだれ、もう葉の黄ばみだした柿の木の間から、夕月がちらりと見えたり、三笠山の落ちつゐた姿が濛い色をして見えたりするのが、何んともいへずに好い。晩秋から初冬へかけての、大和路はさぞいいだらうなあと、つい小説のほうから心を外らして、そんな事を考へ出してゐるうちに、僕は突然或る決心をした。――僕はやはり二三日うちに、荷物はこのまま預けておいて、ホテルを引き上げよう。しかし、いかるがの宿に籠もるのではない。東京へ歸る。さうしておまへの傍で、心しづかにこの仕事に向ひ、それを書き上げてから、もう一度、十一月のなかば過ぎにこちらに來ようといふのだ。さうして大和路のどこかで、秋が過ぎて、冬の來るのを見まもつてゐたい。都合がつゐたら、おまへも一しよにつれて來よう。どうもいまかうして奈良にゐると、一日ぢゆう仕事に没頭してゐるのが何んだかもつたいなくなつて、つい何處かへ出かけてみたくなる。何處へいつても、すぐもうそこには自分の心を豊かにするものがあるのだからなあ。しかし、晝間はさうやつて歩きまはり、夜は夜で、落ちついてゆゑの仕事をつづけるなんといふ眞似のできない僕のことだから、いつそのまま出来かけの仕事をもつて東京へ歸つた方がいいのではないか、とまあそんな事も一とほりは考へに入れたうへの決心なのだ。

僕はホテルに歸つてくると、また氣のかはらないうちにとおもつて、すぐ帳場にそのことを話し、しあさつての汽車の切符を買つておいて貰ふことにした。

「やぶちゃん注：「夕月」昭和一六(一九四一)年十月二十五日の奈良の月の出は午前十時五十四分、正中が十六時十二分、月没が二十一時三十分で、月齢四・五の上弦の月であった(「[こよみのページ](#)」の計算に拠る)。

「三笠山」御蓋山とも。通称、春日山。ウイキの「[春日山](#)」を見ると、「春日山」は春日大社の東側にある標高四九七メートルの「[花山](#)」、若しくは西隣の標高二八三メートルの「御蓋山」の通称。「御蓋山」を「(春日)前山」・花山を「(春日)奥山」と区別する場合もあり、両山及び香山(高山)・芳山などの連峰の総称としても用いられるとある。

「もう一度、十一月のなかば過ぎにこちらに來ようといふのだ」「[タツノオトシゴ](#)」の「[年譜](#)」によれば、この昭和十六年十月二十九日に帰京した後、十一月中に二日ほどで「[曠野](#)」を脱稿した。その後は一週間ほど病臥したものの、この言葉通り、同年十一月

三十日に奈良ホテルを再訪、三輪山・飛鳥などを跋涉した後、十二月四日の夕刻に神戸、五日には倉敷を散策、位十二月六日の午後には帰京している（但し、夫人は同伴していない模様）。因みに、その二日後の十二月八日、太平洋戦争が勃発している――」。

十月二十六日、斑鳩の里にて

けふはめづらしくのんびりした気もちで、汽車に乗り、大和平をはすに横ぎつて、佐保川に沿つたり、西の京のあたりの森だの、その中ほどにくつきりと見える薬師寺の塔だのをなつかしげに眺めながら、法隆寺驛についた。僕は法隆寺へゆく松竝木の途中から、村のはうへはいつて、道に迷つたやうに、わざと民家の裏などを抜けたりしてゐるうちに、夢殿の南門のところへ出た。そこでちよつと立ち止まつて、まんまへの例の古い宿屋をしげしげと眺め、それから夢殿のはうへ向つた。

夢殿を中心として、いくつかの古代の建物がある。ここいらは厩戸皇子の御住居のあとであり、向うの金堂や塔などが立ち竝んでおのづから嚴肅な感じのするあたりとは打つて變つて、大いになごやかな雰圍氣を漂はせてゐてしかるべき一廓。――だが、この二三年、いつ來てみても、何處か修理中であつて、まだ一度もこのあたりを落ちつゐた氣もちになつて立ちもとほつたことがない。

いまだにそのまわりの傳法堂などは板がこひがされてゐるが、このまへ來たとき無慙にも解體されてゐた夢殿だけは、もうすつかり修理ができあがつてゐた。……

そこで僕はときどきその品のいい八角形をした屋根を見あげ見あげ、その小ぢんまりとした庭を往つたり來つたりしながら、

ゆめどのはしづかなるかなものもひにこもりていまもましますがごと

義疏のふでたまたまおきてゆふかげにおりたたしけむこれのふるには

そんな「鹿鳴集」の歌などを口ずさんでは、自分の心のうちに、さういつた古代びとの物靜かな生活を蘇らせてみたりしてゐた。

僕は漸く心がしづかになつてから夢殿のなかへはひり、祕佛を拜し、そこを出ると、再び板がこひの傍をとほつて、いかにも度ましげに、中宮寺の觀音を拜しにいつた。――

それから約三十分後には、僕は何か赫かしい目つきをしながら、村を北のはうに抜け出し、平群の山のふもと、法輪寺や法起寺のある森のはうへぶらぶらと歩き出した。た。

ここいら、古くはいかるがの里と呼ばれてゐたあたりは、その四圍の風物にしても、又、その寺や古塔にしても、推古時代の遺物がおほいせぬか、一種蒼古な氣分をもつてゐるようにおもわれる。或ひは厩戸皇子のお住まひになられてゐたのがこのあたりで、さうしてその中心に夢殿があり、そこにおける眞摯な御思索がそのあたりのすべてのものにまで知らず識らずのうちに深い感化を與へ出してゐたやうなことがあるかも知れない。さうしてこのあたりの山や森などはもつとも早く未開状態から目覺めて、そこに

無數に巣くつてみた小さな神々を追ひ出し、それらの山や森を朝夕うちながめながら暮らす里人たちは次第に心がなごやかになり、生きてゐることのよろこびをも深く感ずるやうになりはじめてゐた。……

そうだ、僕はもうこれから二三年勉強した上でのことだが、日本に佛教が渡來してきて、その新しい宗教に次第に追ひやられながら、遠い田舎のはうへと流浪の旅をつづけ出す、古代の小さな神々の侘わびしいうしろ姿を一つの物語にして描いてみたい。それらの流謫の神々にみたく同情し、彼等をなつかしみながらも、新しい信仰に目ざめてゆく若い貴族をひとり見つけてきて、それをその小説の主人公にするのだ。なかなか好いものになりさうではないか。

行く手の森の上に次ぎ次ぎに立ちあらわれてくるほふりんじ法輪寺やほつきじ法起寺の小さな古塔を目にしながら、そんな小説を考へ考へ、そこいらの田圃の中を歩いてゐると、僕はなんともいへず心なごやかな、いわばパストラルな氣分にさへなり出してゐた。

「やぶちゃん注」：「タツノオトシゴ」の「年譜」によれば、この昭和一六（一九四一）年十月二十六日には、『京都の甲鳥書院に署名をしに出かけ』て『鴨川べり「ちもと」で晩飯を御馳走してもらう』とあり、ここに記されている法隆寺の夢殿観音を拝観したのは実はその翌二十七日のことである。その翌日の十月二十八日朝、仕事を片付けるために奈良ホテルに荷物を預けたまま、ひとまず帰京を決意し、奈良ホテルを発って、そのまま滋賀に向い、琵琶湖ホテルに一晩泊まっている、とある。帰京（奈良ホテルに一度戻って）はその翌十月二十九日のことであつたが、次の最終章も「十月二十七日、琵琶湖にて」とあつて一日手前にずれている。この「十月」を急速にコーダに持ち込むため、現実の事実が持つ退屈な日常的事実を捨象圧縮変更して緩んだ時間を消し去つておく必要があつたものかとも思われる——それは琵琶湖の湖水の音の情景を自らの「曠野」のイメージの中に封じ込めるためでもあつたのではなからうか——。

「大和平」あまり聴かない言葉であるが、奈良盆地は大和平野とも言うので、違和感はない。但し、先行する十月十二日の午後の章段では「やまとだひら」とルビする。

「夢殿」[ウイキの「法隆寺」](#)から引く（アラビア数字を漢数字に代えた）。「奈良時代の建立の八角円堂。堂内に聖徳太子の等身像とされる救世観音像を安置する。夢殿は天平十一年（七三九年）の法隆寺東院創立を記す『法隆寺東院縁起』の記述からその頃の建築と考えられているが、これを遡る天平九年の『東院資材帳』に「瓦葺八角仏殿一基」の存在が記され、その頃に創立された可能性も考えられている。八世紀末頃には「夢殿」と呼称される。『奈良時代の建物ではあるが、鎌倉時代に軒の出を深くし、屋根勾配を急にするなどの大修理を受けている。昭和の大修理の際にも屋根を奈良時代の形式に戻すことはしなかつたため、現状の屋根形状は鎌倉時代のものである。基壇は二重で、最大径が』十一・三メートル、『堂内は石敷。堂内の八角仏壇も二重で、その周囲に八本の入側柱が立ち、入側柱と側柱の間には繫虹梁を渡す。入側柱と側柱は堂の中心に向かつ

てわずかに傾斜して立つが、これは「内転び」と呼ばれる中国渡来の手法である』。

「例の古い宿屋」先に出た虚子の「斑鳩物語」の大黒屋。

「この二三年、いつ来てみても、何處か修理中であつて」法隆寺はこの七年前の昭和九（一九三四）年から「昭和の大修理」が開始されており、金堂・五重塔を始めとする諸堂宇の修理が行われたていた（因みに、この「昭和の大修理」は第二次世界大戦を挿んで半世紀余りに亘って続けられ、昭和六〇（一九八五）年に至って漸く完成記念法要が行われている。またこの間、昭和二四（一九四九）年一月には修理解体中の金堂で不審火が発生、金堂初層内部の柱と壁画総てが焼損してしまった（以上はウイキの「法隆寺」に拠る）。

「立ちもとほつたことがない」「立ちもとほる」は「立ち徘徊もてほる」で、あちこち歩き回る・行きつ戻りつする・ぶらつく・彷徨するの意で、万葉時代からある古語である。「傳法堂」聖武天皇夫人橘古那可智たちばなのこなちの住居を仏堂に改造したもの。夢殿の背後にある。

「祕佛」夢殿中央の厨子に安置されている国宝観音菩薩立像（救世観音）。飛鳥時代。木造。ウイキの「法隆寺」から引く。『長年秘仏であり、白布に包まれていた像で、明治初期に岡倉覚三（天心）とフェノロサが初めて白布を取り、「発見」した像とされている（岡倉らによる「発見」については伝説化されている部分もあり、それ以前の数百年間、誰も拜んだ者がいなかったのかどうかは明らかでない）。現在も春・秋の一定期間しか開扉されない秘仏である。保存状態が良く当初のものと思われる金箔が多く残る』。「鹿鳴集」この前年の昭和一五（一九四〇）年五月二十二日に刊行された歌人で美術史家の會津八一（明治一四（一八八一）年～昭和三一（一九五六）年）が還暦を機に「南京新唱」から今までの短歌を纏めた歌集。過去に発表された短歌に推敲を重ねて修正を加え、全三百三十二首を収録する。斎藤茂吉を初めとして多くの文化人から絶賛され、歌人としての評価を決定づけた一冊であった（「新潟市 會津八一記念館」公式サイト内のこちらの解説を参照した）。

「中宮寺の観音」「中宮寺」は法隆寺の北東に隣接する聖徳太子所縁の寺。本尊は飛鳥時代の作になる木造菩薩半跏像。像高百三十二センチメートルで、広隆寺弥勒菩薩半跏像とよく比較されることから、多くの人が疑いなく弥勒菩薩像と思っている例の少女のような髪型の観音菩薩半跏像である（あの髪型は双鬢そごうげいと呼び、古代中国では双鬢そごうげいと呼ばれる未婚女性の髪形である）。但し、ウイキの「中宮寺」によれば（アラビア数字を漢数字に代えた）、『寺伝では如意輪観音だが、これは平安時代以降の名称で、当初は弥勒菩薩像として造立されたものと思われる。国宝指定の際の官報告示は単に「木造菩薩半跏像」である。材質はクスノキ材。一木造ではなく、頭部は前後二材、胴体の主要部は一材とし、これに両脚部を含む一材、台座の大部分を形成する一材などを矧ぎ合わせ、他にも小材を各所に挟む。両脚部材と台座部材は矧ぎ目を階段状に造るなど、特異な木寄せを行っている。本像の文献上の初出は建治元年（一二七五年）、定円の『太子曼荼羅講式』で、同書に「本尊救世観音」とあるのが本像にあたりと考えられている。それ以

前の伝来は不明である。現状は全身が黒ずんでいるが、足の裏などにわずかに残る痕跡から、当初は彩色され、別製の装身具を付けていたと思われる」とある。

「度ましげに」老婆心乍ら、「つつましげに」と読む。

「平群の山」法隆寺の背後、「古事記」や「万葉集」詠まれた平群山、現在の矢田丘陵一帯を指す。

「法輪寺」中宮寺からほぼ真北に八百二十メートルの位置にある聖徳太子所縁の寺。

「法起寺」中宮寺から東北に一・一キロメートルの位置にある聖徳太子所縁の寺。法隆寺の夢殿南門（大黒屋前）から実測すると凡そ一・六キロメートル。虚子の「斑鳩物語」で大黒屋に泊った主人公が翌日、小僧さんとアクロバットのように登り、お道と了然の逢引きを見下ろすのが、この三重の塔である。

「僕はもうこれから二三年勉強した上でのことだが、日本に佛教が渡来してきて、その新しい宗教に次第に追ひやられながら、遠い田舎のはうへと流浪の旅をつづけ出す、古代の小さな神々の侘びしいうしろ姿を一つの物語にして描いてみたい。それらの流謫の神々にあたく同情し、彼等をなつかしみながらも、新しい信仰に目ざめてゆく若い貴族をひとり見つけてきて、それをその小説の主人公にするのだ。なかなか好いものになりさうではないか」……残念なことに、この壮大な零落してゆく神々の精神史をサブ・ストーリーとする貴種流離譚は、戦争と宿痾のために遂に作品に仕上げられることはなかったのである……。

「パストラアル」英語：Pastorale（パストラル）で、田園詩風の、牧歌的な、の意。」

十月二十七日、琵琶湖にて

けさ奈良を立て、ちよつと京都にたちより、往きあたりばつたりにはひつた或る古本屋で、リルケが「ぼるとがる文」などと共に愛してゐた十六世紀のリヨンびとルイズ・ラベといふ薄倅の女詩人のかはいらしい詩集を見つけて、飛びあがるやうになつて喜んで、途中、そのなかで、

「ゆふべわが臥床に入りて、いましも甘き睡りに入らんとすれば、わが魂はわが身より君が方にとあくがれ出づ。しかるときは、われはわが胸に君を掻きいだきぬるがごとき心ちす、ひねもす心も切に戀ひわたりぬし君を。ああ、甘き睡りよ、われを欺りてなりとも慰めよ。うつつにては君に逢ひがたきわれに、せめて戀ひしき幻をだにひと夜與へよ。」

といふ哀婉な一章などを拾ひ読みしたりしつつ、午過ぎ、やつと近江の湖にきた。

ここで、こんどの物語の結末——あの不しあはせな女がこの湖のほとりでむかしの男と再會する最後の場面——を考へてから、あすは東京に歸るつもりだ。

いま、ちよつと近所の小さな村を二つ三つ歩いてきてみた。どこの人家の垣根にも、茶の花がしろじろと咲いてゐた。これで、晝の月でもほのかに空に浮かんでゐたら満點

だが。――

「やぶちゃん注：辰雄はこの奈良ホテル滞在中、少なくとも三度は京都に出ている。「タツノオトシゴ」の「年譜」を見ると、十月十五日の条に『京都に出かける 円山公園で「いもぼう」を食べる 出町柳の古本屋で掘り出し物』というのが目に留まる。「曠野」に繋がるイメージとして、ラベの Rilke 訳を、かの「今昔物語集」の女がはかなくなつた琵琶湖湖畔というロケーションの直前に手に入れたことにして、辰雄がここに書簡体小説のコードとしての抄訳を挟んだもののように私には読める。――本章を以って「十月」の全篇が終わっている。――

「ぼるとがる文」書簡体小説の先駆となつた手紙。ポルトガルの尼僧マリアナ・アルコフォラードが一六六五年から一六六七年にかけてポルトガルに駐屯したフランス軍士官シャシリ公爵にあてた五通の恋文で、長らく真実の書簡集と思われていたが、現在ではフランスのギュラーグ伯による創作と推定されている（平凡社「マイペディア」に拠る）。堀辰雄の筆に成る「リルケ年譜」には、『一九一三年 二月遂に西班牙より空しく歸り、六月頃まで巴里に滞在す。「マリアの生涯」(Das Marien-Leben: 詩集)を著す。又、日頃愛讀せる葡萄牙尼僧マリアンナ・アルコフォラードの遺せる五通の戀文「ぼるとがる文」(Portugiesische Briefe)を譯す。』とある（引用は青空文庫所蔵の当該作に拠つた）。

「ルイズ・ラベ」フランスの女性詩人ルイズ・シャルラン・ペラン・ラベ (Louise Charlin Perrin Labé 一五二五年～一五六六年)。モーリス・セーヴ (Maurice Scève 一五〇〇年頃～一五六四年頃) などと並び称せられるルネサンス期のリヨンで活動した代表的な詩人であり、「ラ・ベル・コルディエール」(La Belle Cordière 綱屋小町) と呼ばれた（[以上はウィキの「ルイズ・ラベ」](#)とそのリンク先に拠つた）。前と同じく堀辰雄の「リルケ年譜」には、『一九一四年 ミケランジェロの詩を譯す。又、十六世紀中葉のリヨンの閨秀詩人ルイズ・ラベの遺せる二十四篇のソネット (Die vierundzwanzig Sonette der Louize Labé) を譯す。歐洲大戦勃起し、巴里を立退く。』とある。当時、リルケ三十九歳。因みに、この昭和一六（一九四一）年十月当時、辰雄は満三十六歳であった（彼は明治三七（一九〇四）年十二月二十八日生まれ）。堀辰雄には彼女の [リルケのドイツ語訳「ソネット集」](#) から五篇を選んで邦訳したものがある（私の原文附の電子化したものをリンクしておいた）。

十月

堀辰雄

附やぶちゃん注 完